

えっ？そんな働き方ってあり？

会社に雇われないで、
パソコン一台で暮らす方法

元ホームレス
でも、できた！

情熱自由人

ブラック企業、一流企業、解雇、ホームレス...

ありとあらゆる苦汁を味わってきた男が最後に行き着いた、

まったくストレスを感じない、珠玉の生き方とは？

これまでの常識をぶち壊す、新しい時代の働き方！

はじめに . . .

僕は今、パソコン一台で仕事をし、毎日が自由な生活を送っています。

好きな場所で、

好きな時間に仕事をし、

好きな時間に寝て、

好きな時間に起き、

好きな物を食べ、

好きな場所に遊びに行く！

という、まさに自由奔放な生活です。

なぜ？こんな自由な生活を送れるのかというと、インターネット上に勝手にお金が入ってくるような仕組みを自分で作ったからです。

インターネットなので、僕が働かなくても、24時間、フル稼働で不特定多数の人間に勝手にアプローチしてくれています。

だから、会社に雇われる必要もないし、必要以上に働かなくていいし、気の合わない人間とも話す必要がありません。

勝手にお金が入ってきて、自分で好きなように「どのように一日を過ごすか？」を決めているのです。

しかし、そんな僕も会社員時代、人生の底辺にいました。

会社に行くということが我慢ならず、

人と会うのが嫌でたまらず、

仕事自体が楽しくもなく、

何をしても満たされず、

これ以上ないくらい、社会というものをうらみまくっていました。

僕という人間は、会社に雇われて生きられない人間だったのです。

だから、起業して自分で稼ぐという道しか存在しなかった。

一人でもやれるビジネスを探すしか方法がなかったのです。

そうしてやっと行き着いた先が、今の生活でした。

もし、あなたが今、会社に勤めることが嫌でたまらず、人生に満足しておらず、自分で進みたい道を自由に決めていきたい方であれば、この本はお役に立てるかもしれません。

同じように会社に勤めるのが嫌でたまらず、何の変哲もない一般人である僕が、パソコンひとつで生きていけるようになった経験をまとめた内容だからです。

僕が会社という組織でどのように物事を感じて過ごしていたのか？

どうして、今の暮らしに行き着くようになったのか？

なぜ、会社員は駄目で、起業だったら大丈夫だったのか？

一方的な感情も含まれているかもしれませんが、できるだけ当時の出来事やその時感じていた感情を正確に伝えようと、ありのままに僕が進んできた人生をお話させて頂こうかと思います。

僕の過去の経験や、今の僕の生き方が、『会社という組織に属することの出来ない』あなたの人生の新しいページを開くヒントとなれば、幸いです。

地獄への幕開け

2010年、4月・・・

僕は、地元鹿児島県にある鹿児島大学工学部海洋土木学科を卒業し、某準大手に位置する、〇〇建設に入社を果たした。

※会社の不利益になる恐れがあるため、名前は伏せさせていただきます。

〇〇建設と言えば、堅実な経営と、社員の人柄の良さが評判の会社で、建設業界でもそれなりに知名度は高い会社の一つだった。

周りの知人や親戚に話を聞くと、「よく頑張ったな！おめでとう！あの会社に入れたのは素晴らしいよ。中々、入れる会社じゃないぞ！」と、賞賛の声を僕にかけてくれた。

両親共に大変喜んでくれ、僕の就職祝いにと、高級日本料亭などで僕をねぎらい、「やっとこれで一安心だ！」と肩をなでおろしていた。

僕も、これから始まる新しい生活に、これまで以上の幸福が始まるのだろう！と胸と希望を膨らませ、今か今かとその時を待ち構えていたのを覚えている。

それが、地獄の日々の始まりだとはこの時は想像だにしていなかった。

僕は、1987年、6月、鹿児島県の霧島市で生まれた。

元々、人を笑わせるのが大好きなお調子者の性格で、親戚達が一同に会する時は、お尻にタバコやケミホタル(夜釣りの際に使う、ウキにつける光る棒のようなもの)をはさみ、バスタオルでそれを覆いながら、蛍の真似をする芸をして、小銭などを稼いでいた。

自分でもアホな糞ガキだったと思う。

一緒に馬鹿やっていたいところは、芸人目指して、10年以上活動をしている。

たまにテレビで見かけるが、正直つまらん！

一生、人気が出ることはないだろう。

だけど、小さい頃に『人を笑わせてお金を貰う！』という自分の好きな道を見つけ、一心不乱にその道の活動を続けられているのは正直羨ましいなと、今は思う。

中学校、高校は特に目新しいことはなかった。

ただ、漠然と生きていた。

いじめられることもなく、飛びぬけて優秀なワケでもなく、みんなに愛されるでもなく、

本当に普通の学生だったと思う。

めちゃくちゃ面白いと感じたことはあまりなかったが、それなりにまあ、不満のない学生生活だった。

大学は、一応、国立ではある地元の鹿児島大学に入社できた。

元々の成績では絶対に国立の大学は絶対に無理だったが、センター試験で鉛筆を転がしていたら、それがめちゃくちゃ当たって、推薦でたまたま合格できたのである。

いつもの成績より、100点も高い点数を叩き出したのだから、マグレとしか、いいようがないだろう。

じいちゃんが、センター試験のホンの少し前に他界した。

今でも、あの鉛筆転がしは、じいちゃんが近くに来て、転がしてくれたと信じている。

本当に神がかったかのように、マークシートの答えが当たりまくった。

大学生生活は半端じゃないほど最高に楽しかった。

男ばかりだったが、学科全員が、馬鹿できて、面白くて、皆と気があった。

夜は、毎晩飲み歩きながら、昼間は賭け麻雀をしたり、学科だけでサッカーチームを組み、サッカー合宿まで自分達で行った。

試験の際には、学校に近い友達の家で、全員で泊まりこみ、分からない教科を教えあい、替え玉作戦まで決行して、試験を乗り切ったのはいい思い出である。

あそこまで仲の良い、学科というのも今までなかっただろう。

さすがに、男なので、男ばかりではつまらない。

性欲盛んな20代前半だ！

合コンにも行きまくった。

多分僕は、大学時代に30回近くは合コンに行っただろう。

あの女性と、会うまでの待ち時間が、最高にワクワクしたのを思い出す。

中々、彼女は出来なかったが、大学三年生の頃に、とても美人な彼女と知り合うことが出来、付き合うことになった。

僕は、かなり面食い男なので、町を歩けば、誰からも声を掛けられる彼女がとても自慢だった。

彼女自身、僕のことを相当気に入ってくれ、話が尽きることもなく、卒業して落ち着いたら、結

婚しようという約束までしていた。

大学は人生の夏休みだという言葉があるが、本当に、僕にとっては人生の夏休みだったと言えるだろう。

家族は、父、母、兄、僕の四人構成である。

両親は福岡で暮らしていたから、出産時だけ、鹿児島に戻り、僕を生んでからすぐに福岡に戻ったから、実際に育ったのは福岡県の早良区という場所で、自分でもどっちを故郷と呼んでいいのか未だに分からなくなることが多い。

小学校の四年生までは福岡に住んでいたのだが、親父が両親の世話をしたいという希望を基に、鹿児島に戻ってきた。

本当の所は、両親の世話というものをダシにして、『釣りをしたいから』というのが、本音だったらしい。

我が、親父ながら、呆れた釣り馬鹿である。

鹿児島に引越ししてきたとき、兄貴と最初に公園でサッカーをしに行くことにした。

僕は、幼稚園くらいから、兄貴に連れられて、いつもサッカーをやっており、将来は、プロのサッカー選手になるのが夢だったので、幼少の頃から、三つ上の兄貴とサッカーをして練習できたのは、そこそこ力になったと思う。

まあ、当然のごとくサッカー選手にはなれなかったが・・・

ともかく、その頃から同年代の友人と遊ぶことは少なく、いつも年上の兄貴の友人達とサッカーの練習ばかりやっていたのである。

だから、その日もほんの暇つぶしのつもりで、二人でボールを軽く蹴りにいったのだった。

僕らがボールを蹴り始めると、同年代くらいのある二人のサッカー少年が僕らと同じようにボールを蹴っていた。

子供の頃というのは、誰に対しても話しかけられるものだ。

すぐに僕は、その内の一人に話しかけ、サッカーの試合をやろうと持ちかけた。

相手の合意も得て、すぐに試合が始まった。

僕と兄貴チーム対、その少年二人・・・

はっきり言って、まったくゲーム内容は覚えていないが、それなりに楽しかった気がする。

わざわざ、こんなくだらない話を始めたのには理由がある。

実は、その二人の内の一人が、未だに僕の親友で(出会ってから、20年近く)、恋愛相談から仕事相談、人生相談に至るまで、多大な好影響を与えてくれる人物になったからだ。

彼には本当に感謝している。

彼と出会っていなかったら、今の僕は本当にありえないだろう・・・。

後々、何度も出てくるので、今のうちにこんな出会いから始まった！というのを知っておいて欲しい。

とにかく僕は、普通の学生時代を過ごし、何の変哲もない人生を歩んでいた。

そして、それなりに大手の会社に内定を貰うことになり、これからもその普通の人生を歩んでいけるものだと思っていた。

とにかく普通に暮らしていき、普通に結婚して、普通に家庭を築き、普通に仕事をしていく・・・

これが僕の思い描いていた最初の人生の目標だった。

まさか、今のような生き方になるとは思わずに・・・

さて、僕の紹介をそこそこ行ったところで話を戻そう。

入社してからの話だ・・・。

僕は新しい人生の幕開けに期待と不安を混じらせながら、本社がある東京へ足を運ばせた。

入社式兼、研修のためである。

入社式では、驚くほどたくさんの新入社員が溢れかえっていた。

建築部門で120名、土木部門で30名・・・

あまりはっきりとは覚えていないが、全部で150名は新入社員が居たと思う。

みんな、初々しい格好で、社会人として垢抜けない顔をしていた。

東京での滞在時は、土木、建築合わせて五人ほどの相部屋方式となっていたから、僕は自分の他に四人の男達と一緒に三ヶ月くらい暮らすこととなった。

この一緒になった四人というのが、本当に良い奴等ばかりで、全員面白い奴だった。

まるで、大学の時に一緒にいた学科のメンバー達のような奴等である。

初っ端から、グループ間の中でも頭角のようなものを現し、なぜか、建築で他のグループだった奴の一人も加わり、女性社員なども結構、僕らの場所にやってきて盛り上がっていた。

メンバーの一人が、コマシ野郎だったのである。(というか、話上手？笑)

最高に面白いメンバー、研修も学校の延長線上のようなもので、適当！

僕は早くも、調子が上がってきて、最大級のお馬鹿さんとしての地位を確立した。

「えっ？今から、会社から出された課題をやる？・・・いやいや・・・ないでしょう？今日も飲みに出かけようぜ！」

「おいおい・・・情熱・・・お前、そんなこと言ってるけど、今日の課題、お前一人じゃ解けないだろう？」

「いいじゃん！だって、最終的にはお前らの答え見れるだろう？本当の仕事じゃないから意味ないって・・・それより、今は中々会えなくなる友人との交流を大事にすべきだろう？」

・・・典型的な馬鹿である。

しかしながら、お馬鹿さんは、結構人から愛される。

人は、お馬鹿な一面を見せると、安心するので、近づきやすくなるのだ。

それを肌感覚で分かっていた僕は、大体この手を使って、どんなグループに行っても人と早く仲良くなる方法を身につけていたから、ここでもその手を使って、みんなと仲良くなったのである。

研修もまともに勉強するワケでもなく、如何に皆を笑わすか？ばかり考えていた・・・

さて、そんなこんなで、夢のように楽しい三ヶ月はあっという間に過ぎていった。

「なんだ・・・、社会人になると変わるって言われているけど、大して学生の内と変わらないじゃん！社会人も楽勝だな・・・」

当時の僕が、そう思ったのも無理はない。

ようやく、自分が馬鹿だと気が付く・・・

九州支店北九州〇〇工事！

僕が配属された、建設現場の名前である。

こちらも、会社に悪影響を及ぼすといけないので、伏せさせてもらうが、ここに配属されたのが、僕のお運の尽きだった。

なんと、初っ端から三億円ほどの赤字を抱える現場だったのだ。

建設事業を知らない人は、ピンと来ないと思うが、赤字の現場というのは最悪である。

如何にコストを抑えるか？ばかりが選考して、まるっきり娯楽に使える余裕がない。

唯でさえ、工事現場というものは辛いものだから、ちょっとした娯楽すらないと、更に職場全体の空気は重くなるのだ。

この辛さというものは、想像を絶するものがある・・・。

これから詳しく話していくが、もし、僕が最初に配属された現場が、赤字現場じゃなかったら、もう少し違った人生になっていたんじゃないか？と思うほどだ。

それくらい、赤字の現場というのは苦しい場所だと理解して頂きたい・・・

更に悪いことに、現場が北九州だった。

北九州の土木屋さんは、結構ヤンチャな人が多く・・・というか、ヤクザ系列の人がものすごく多かった。

普段は見せないが、手足首からチラリと刺青を除かせ、異常なほど切れるのが早い。

僕は結構、作業員さんと仲が良かったから色々話を聞いていたが、刑務所にいた人もチラホラおり、作業を指示を一つ出すのも最初の内は怖かった。

まず、現場につくと、最初の「えっ？」があった。

事務所が、超絶オンボロな、木造建物なのだ。

元々公民館だったものを借りたそうだが、取り壊す寸前のもので、久々に田舎のばあちゃん家に戻った気がする建物だった。

当然、便所は”ボットン便所！”

僕が大切にしていたポールスミスのジッポもそこへ落としてしまい、途方に暮れたのを思い出す。

そして、何よりも衝撃を受けたのが所長である。

僕が配属された現場の所長は、九州支店の首領と称されていて、あり得ないほどの鋭い眼光と、人を寄せ付けないオーラを放っていた。

タバコをスパーっと吐き散らし、僕が赴任初日の挨拶をすると、

「おう！」

と一言漏らし、すぐにそっぽを向いた。

まるでヤクザだった。

(この所長とこれからやっていくのか・・・)

はっきり言って、入社一年目のペイペイ野郎には刺激が強すぎた。

いきなりビビってしまい、僕はかなり萎縮した。

実は、その現場に派遣される前、知り合いの先輩からも散々怖い所長だから気をつけるようにとも指摘を受けていたのだ。

だから、なおの事、暴力的圧力に怖気付いたのだった・・・。

そして、この所長のおかげで、この現場は最悪な事態へと陥っていく・・・。

「情熱君、拡張子って分かる？」

「いえ、分かりません・・・」

最初に与えられたのが、写真をまとめる仕事だった。

この現場の施工代理人である、Y氏が僕に拡張子を変更してjpg形式のものを、png形式に変更させる作業を頼んできたのだった。

パソコンなど、見るのも嫌いで、なるべく触らないようにしてきた僕である。

たかが、拡張子をいじくる作業ですら、やり方が分からなかったのだ。

「パソコンにデータを保存するときは、使うソフトの形式によって拡張子と呼ばれるデータ名の末尾を変更しなければいけないからね。ほら、例えばワードの拡張子はdocxだから、エクセルで開こうとしても表示されないだろう？こんな感じで、データを保存するときは色々拡張子をいじくることがあるから、今度から覚えておいてね。」

とても丁寧な説明で、分かりやすかった。

Y氏は超がつくほど、頭の回転がよく、新入社員の僕に対しても、物凄く優しく接してくれた。

それもそのはず、鹿児島大学よりも遥かに偏差値の高い、某有名大学を卒業した彼は、若干入社六年目にして施工代理人として選ばれ、28歳で現場の総指揮をとっていたのだ。

僕が出会ったときも、まだ32歳だったが、数十億の現場の施工代理人をその若さで勤めていた。

「おお、この人みたいに僕はなろう！」

最初の頃の僕は、Y氏に憧れを抱き、こう思ったものである。

しかし、それは大きな間違いであるということに、後で気がついた。

このY氏こそが、最初は人当たりのよい、仏のような面の皮を被った鬼だったのだ。

僕がこれまでの人生で出会った中で、最も最悪な男だったと思っている。

さて、後のメンバーは、僕の一年前に入社した先輩と、入社五年目になる先輩、他の会社から派遣としてやってきていた測量屋さんが二人に、40歳くらいの工事主任、後は元、九州支店部長を務めたこともある、超ベテラン相談役という構成だった。

工事は既に遅れ気味で、まだ着工すらされていなかった。

工事は、基本的に「設計書の見直し、確認→施工計画書の作成→近隣住民への説明会→現場測量での現地捜査→工事を頼んだ”施主”との打ち合わせ→工事開始」へと進んでいく。

僕らの置かれている場所はまだ、施工計画書の作成や近隣住民への説明会程度だった。

はっきり言って、資料の膨大さは半端ではない。

なにせ、2.4kmもある高速道路を作る工事だったのだ。

だから、メンバーも全然足りておらず、施主はもっと人を送り込むようにと、その段階から僕ら

に迫っていた。

にも関わらず、なぜか、所長は人を呼ぼうとはしていなかった。

これくらい的人数で仕事はできる！という自分の手腕を見せたかったのだろう。

結局、年をくった上司達は面倒くさい仕事はしないのだから、ほとんどの仕事は、若い施工代理人、入社五年目の先輩、入社二年目の先輩と、超ペイペイの僕！という四人で進めていくこととなったのである。

「情熱君は、測量屋さんのSさんとバディを組んで、工事全体の測量をメイン担当にしようかな」

現場に派遣されてから二週間ほどが経ったころ、Y氏が僕にメイン担当を振ってきた。

「測量は、工事全体の要とも言えるし、新人が覚えるべき、最初の関門だ。プロの測量屋さんから、仕事を教えてもらえるなんて、ほとんどないぞ！良かったな。」

測量は光波と呼ばれる特殊な器具を使って、正確な位置を把握するために行われるものだ。

当たり前だが、工事は正確な平面の正確な高さで作られないといけないので、測量そのものがズレてしまうと、全てが駄目になってしまう。

だから、ミリ単位での正確さで、何も無い現地に杭や印を打ちつけ、それを元に高速道路を作っていくのだ。

僕の直属上司になったSというのは、大体34歳くらいの人で、僕らの会社の測量担当として手伝いに来ていた派遣社員だった。

ただ、彼にも若干問題があった。

いや、若干ではなく、かなり問題があった。

相当に口が悪いのだ。

後から手伝いに来てくれたSと同じ会社のMさん(現在その会社の部長らしい)すら、嫌気が差して現場を辞めてしまったほどだから、どれほど酷かったかは想像してもらいたい。

この人が僕が社会人になって最も驚かされた最初の上司だった。

「はあ～、こんなションベンガキと、一緒に仕事をしないといけないのかよ～」

初っ端、彼に連れられて測量に出かけたとき、いきなりこう言われた。

「俺が前に、〇〇建設に派遣で入った時もさあ、お前みたいなションベンガキとタッグを組まされたよ。ペロってあだ名つけてやってさあ・・・、めちゃくちゃいじめてやったな。はは・・・」

まだ、ロクに僕の事を知らないのにも関わらず、コレである。

いくら何も知らない新人だとしても、さすがに会ったばかりの人間に対して失礼だろう！

そう思ったが、僕はかなり小心者だった。

今もそうかもしれないが、入社した当時は中学生に上がったばかりの小学生のようなもので、30代くらい大人の男性が意味もなく、恐ろしく見えたのである。

だから、Sが最初に吐いたこの言葉でもかなりビビっていた。

ただでさえ、初めての本格的測量で仕事に対する不安がかなりあった。

その上、上司がいじめを喜ぶような人間だと最初に分かってからは、どんな風に仕事を教えられるのだろう？と、その恐怖は倍増されたのである。

「おら！まず、ここに光波を設置しろ！三分以内に設置できなかつたら殺すからな。」

初っ端から、Sの狂ったような怒声が現場に鳴り響いた。

心配していた通り、相当厳しかったのだ！

先ほど少し触れた測量器具の光波だが、実は設置ひとつとっても難しい。

学校の実習でやった平面とは違い、現場は荒れた急斜面などがほとんどなので、なおさらだ。

慣れれば、簡単で一分もあれば設置できるようになるのだが、真面目に実習でも取り組んでいなかったような僕は三分どころか、一時間経っても設置できなかった。

今まで真剣に何か物事を為そうという勝負をしてこなかったツケが、この時、初めて襲い掛かったのだ。

「お前は、学校で何学んできたんだ！国立の大学出たんじゃねえのか？才能無さ過ぎだろう！」

焦る僕に容赦のない罵倒が浴びせられる。

「すみません。もう少しだけ待ってください！あとちょっとで設置できそうですから！」

結局、泣きそうになりながら、その日は光波を設置することすら出来ず、怒られるだけの一日となった。

別にここまでの話を聞くと、社会人を経験している人は皆大したことではない！

新人はみんなこういうもんだ！

と思ったことだろう。

確かに、僕もいくら社会人を舐めていたからと言って、これくらいの仕打ちは覚悟を決めていた。

ただ、建設業の恐ろしいところは、この後の宿舍が、上司達と同じ部屋である！ということなのだ。

「コイツさ、光波すら据えられないんっすよ！マジ参りましたわ！」

仕事が終わって、夕飯の時、Sが皆の話題を提供しようと僕の昼間の失態をネタに話を始めたのだった。

「いや、前、〇〇建設に入った時も似たような形で新入社員の教育を任せられてね。そいつも情けなくて、全然仕事できなかつたんですよ。ペロってあだ名をつけてやったんですが、こいつも同じ匂いを感じました。だから、今ここであだ名をつけてやろうと思います。」

『ペロ二号っ!!!!!!』

「どうです？結構、顔と合ってません？」

どっと笑いが起こった！

僕はまさか自分がネタにされるとは思っていなかったのに、ポカンとしていると、

「ペロ二号ってなんじゃそりゃ！はっはっはっ！良かったな情熱！いいあだ名貰えたじゃん。」

となりに居た先輩も大層この名前を気に入ったのか、豪快に笑いながら僕の背中をバンバン叩いてきた。

(仕事の時は良いけど、食事中にまでこんな話をしなくても・・・)

震えが来るほど、怒りを覚えたが、自分が何も出来ないのが分かっていたので、何も言い返すことが出来ず、ジッと下を見つめていた！

そして、そんな言い返せない自分がおさら惨めだった。

絶対に見返してやる！

そう思った僕は、次の日から、昼休みの時間や、仕事が終わった時間を利用して、光波を設置する練習をひたすらやりまくった。

そして、一週間もすると、それなりにどんな場所でも、光波は据えられるようになった・・・

でも、設置ができるようになると、今度は本番である測量が難しく、中々素早く行えない！

「いや～、コイツのものの覚えの悪さは初代ペロ以上ですよ！今日も測量で、一メートル後ろって言うから、下がっていったら、「すみません！やっぱり前でした。」なんて言いやがるから、ハンマー放り投げてやりましたよ。」

来る日も来る日も、仕事のミスを食事の時間に話題のネタにされた。

一日、二日なら我慢出来るが、1ヶ月、二ヶ月と続けられると、すっかりと食欲も失せてしまう……

食事の時間が最も地獄だった。

僕も笑えるような話の雰囲気ならいいのだ！

めちゃくちゃ必死で頑張っているのに、出来ない自分を笑われているのが、とても恥ずかしく、悔しかった。

次第に、宿舎に居ることに耐え切れなくなり、僕は寝る時以外は、なるべく外で散歩をすることが多くなった……

建設現場の新人の仕事は、時代錯誤か！というほど面倒くさいし、古臭い。

なにせ、風呂掃除から朝早く起きてからの掃除が与えられるのだ！

もちろん、大した仕事ではないにしろ、雑用も山ほど与えられる。

測量だけでなく、事務仕事も数え切れないほどあるのだ。

それを残業して僕もやらなければならないのに、それにプラスして、風呂掃除と朝からの掃除である。

意味が分からない。

当然、給料も出ない。

僕は早起きが苦手な人間だったから、結構掃除にも遅れた。

それもまた怒られる。

一年が経過した時、めちゃくちゃ忙しい中間検査の時に、いつも早々と切り上げる50歳くらいのお父さんに、「風呂はまだか？」と言われた時はさすがにぶち切れた。

こっちは、何日もほとんど寝ないで仕事しているのだ。

ちょっとぐらい手伝え！と、殺そうかと思った。

その時も、「先輩に対して何だその口は！」と後で他の先輩に僕が怒られた。

異常な世界である。

ある日、横断測量といって、竹やぶが生い茂った坂道を鎌で切り開きながら、高速道路が出来る予定の現地断面を測量する仕事を行った。

急激な斜面を50cmか1m刻みくらいで、変化を見つけてちょっとずつ測量を行って、最終的に、その断面の図面を作成していくのである。

「おらあ！走れ～！そんなんじゃ終わんないぞ、ボケえ！」

いつものように、Sの怒声が鳴り響いた！

この仕事は半端じゃないくらいキツイ！

連日、真夏の炎天下の中、ずっと重いハンマーと、さまざまな腰道具をぶら下げたまま、竹やぶを鎌で切り開き、急斜面に測量杭を打っていくのだ。

それも何十本も！

僕は幼稚園から大学までずっとサッカーをやっていたので、体力には自信があった。

でも、さすがに慣れていない測量仕事に、怒られる恐怖を感じながらの仕事は、フラフラして倒れそうだった。

というか、実際に倒れてしまった。

日射病である。

その日は、午前中に倒れ、午後は事務所で横になるように指示された。

しかし、その日は支店で、新入社員の歓迎催し会のようなものがある。

さすがに、出ないわけにはいかないだろうと思って、先輩に連れられて、その会に出席したのだが、これもまた、大きなミスだった。

所長がキレたのだ！

「あいつは、寝込んで仕事をしなかつたくせして、遊びには出かけるのか・・・」

事務所に戻ったとき、いつも以上によそよそしい態度で所長が待っていた。

現場というのは、所長は神様だ。

所長が要らないと言えば、現場を飛ばされるし、所長があいつは仕事ができないから、仕事を与えるな！と言えば、それだけで仕事すら回してもらえない場合もある。

僕は、入社してわずか三ヶ月も経たずして、現場の所長にすら嫌われてしまったのだ。

その夜、あまりの悔しさと疲れから、一人男泣きしてしまった。

結構、精神が弱めの僕だが、さすがに泣くほど落ち込んだことは今までなかった。

毎日馬鹿にされ、こき使われまくれ、安月給で死ぬほど仕事を与えられる。

これが会社か？こんなんで、みんな何で耐え切れるんだ？

何も出来ない自分の情けなさと、この先長く続くサラリーマン生活にゾツとした。

「えみ、もう俺嫌だ！」

えみとは、仮名だが、冒頭に説明した、結婚しようと思っていた彼女である。

あまりの耐え切れない仕打ちと、精神の疲れから、僕はいつも愚痴をこぼすようになっていた。

彼女も、最初の内は優しく、僕の話聞いてくれていて、励ましてくれていたのだが、さすがに僕がずっと愚痴を言い続けるのに嫌気が差してきたのだろう。

大学時代、一回も喧嘩をすることのなかった僕たちが、電話をし合う度に喧嘩をするようになっていった。

なぜ？初っ端からこんなキツイ思いをしないといけない？

えみとも上手くいかなかったのは会社のせいじゃないか！あいつら上司のせいじゃないか！

辞めてやる！早く、こんな会社辞めてやる！

これが、当時入社したばかりの僕が四六時中考えていた気持ちだった。

さて、僕の気持ちとは裏腹に、現場はドンドン進んでいく。

と言っても、通常のスปีドより全然進んでいなかったのだが、当時の僕からすれば、ドンドン進んでいくように見えた。

ある日、いきなり、現場を派遣されてから三ヶ月目にして迂回路工事の責任者のようなものを任された。

まったくワケも分からないのに、業者を使って、僕が指揮をとるのだ。

工事担当の役割はこうだ。

まずは、現地の測量を行って、正式な現地の図面を作る。

それから、設計図面にある迂回路との兼ね合いを調整して、現地に設計図面の迂回路位置をポイントしていく。

それが終わったら、撤去工だ。

工事をするのに邪魔な舗装や、水路、土管などを次々撤去していく。

この撤去ひとつとっても、色々な段取りや書類を作らなければならない。

撤去費用がどれくらいの経費になるか割り出すためだ。

何をするのにも、書類が必要なのである。

また、平面位置だけでなく、高さも正確に道路を繋げなければ、段差のある道路が出来てしまうので、その土なども撤去しなければならない。

この土のやり場、他の場所にどう使うか？こういうことも考えないといけない。

まずは、“レベル”という高さを測れる機器を使って、現地の高さを把握する。

それから、実際の道路を作る高さとを差し引いて、撤去する土量を算出するのだ。

もちろん、工事を行う人のために、その高さと言うものも僕らで設置しなければならない。

ここで間違ったら、全て工事もやり直した。

ある程度、綺麗さっぱり物が無くなってきたら、今度はもっと細かい位置出しだ。

道路の周りの水路の位置出し、道路の下の路盤の位置出し、舗装の高さの位置出し・・・

とにかく、めちゃくちゃ色々測量で位置を出していかないといけない。

何度も言うが、水平だけでなく、高さも合わせてで、これをミスったら、全てやり直す。

全部が僕の責任となるのだ。

まだまだやることは山ほどある。

材料の発注に、工事中の保護をするためのバリケードの発注、業者に作業の指示を出すための指示書の作成に、工程書の作成、施主への説明のための資料作りなんかも山ほどあるのだ。

それを、派遣されてわずか三ヶ月の男がそれを全て一人で考えて行っていく。

もう目が回るような忙しさだったし、精神、肉体、共にボロボロになった。

幸い業者の方は、めちゃくちゃいい人だったが、それでもミスばかりする僕に、たまにブチ切れた。

もう、申し訳なささと恐ろしさで、心臓が破裂する。

精神は崩壊寸前で、肉体は疲労困憊、緊張で一日中胃が痛かった。

それでも、無我夢中で仕事をやり遂げた。

これを成し遂げれば、みんなに認めてもらえると思っていたからだ。

馬鹿にされたくない！という想いだけが、僕を動かし続けた。

最終的には、道路が歪んでいて、警察の立会で「これ、測量間違っていないか？」と指摘を受けたが、施工管理のYが「いや、こんなもんですよ！」と嘘を言ってかばってくれた。

僕の測量ミスだったのだが、仮設工事ではあったので、何とかあったのだろう。

立会いの警察もそれ以上何も言わずに帰っていった。

「よく頑張った！」

所長にも、最後にこんな一言を貰えた。

僕は、ホンの少しだけ自信を取り戻した。

やっと、鬼のように忙しかった三ヶ月間を乗り越えてホッとした気持ちを抱えたのは今も覚えている。

しかし、仕事に対する自信は少し取り戻したものの、その分、彼女との時間は奪われていった。

疲れと、忙しさで、ほとんどやり取りを返せなくなり毎日、何十通もメールし合っていたものが、2,3日に一回、一言返すだけになったのだ。

僕は、達成感に浸る喜びよりも、将来的な家庭環境を想像してしまって、不安を感じていた。

「この先、えみと本当にやっていけるのだろうか・・・？」

仕事中は一日中、神経を張り詰めて、夜は深夜になるまでずっとデスクワーク。

仕事ばかりをやり続けることで、自分が家庭を省みない、仕事人間に変わっていくのが怖かった。

さて、話は変わるが、この迂回路が完成する頃、楽しみにしていた行事がひとつだけあった。

同期メンバーとの再会である。

僕のいた前の会社では、夏にもう一度研修が行われる。

あの楽しかったメンバー達と、また会って、お互いの近況を確かめ合えるのだ。

予想通り、というか、期待通り、ほとんどの人間が疲れまくっていた。

すでに、入社した時のメンバーの何人かは、仕事の辛さで1週間ほどで会社を辞めていたし、皆、愚痴ばかり言っていた。

が、しかし、さすがに僕の場所を越えるキツさを経験している人はいなかった。

いきなり、工事の総指揮をとる担当になったなんて奴いなかったし、大体、直属で〇〇建設の正社員が上司としてついてくれ、先輩のお付として、ちょっと仕事を振られている程度だった。

中には、毎晩8時頃には仕事を切り上げられ、毎晩、先輩と飲んでいる！なんて、羨ましい奴もいた。

僕は、その頃既に、早くても夜の11時か12時まで仕事をし、朝は六時から掃除！っていう体制だったし、皆「キツイけど、笑いは現場に溢れている」というのを聞いて、正直驚いたし、むちゃくちゃうらやましかった。。

当時の僕は、仕事は辛い事や、苦しいことをひたすら耐えること！と考えていたくらいだから、笑顔のある職場なんて想像もしていなかったのだ！

ウチの事務所は、その頃から既に暗い雰囲気に含まれていた。

赤字なのに、工事が全然進まないし、所長がケチりまくって、材料を安くし過ぎようとして、バリエードなんかを全部自分たちで手作りで作っていたくらいである。

今考えると、全くの無駄で、普通の現場から考えると、まったくと言って良いほど現場が進んでいなかった。

当然、施工代理人は不機嫌になるし、その空気が職場の全体を覆ってしまう。

工事全体の指揮を執る、施工代理人が全く笑いもせず、ひたすら、カタカタ仕事だけをしていくのだから、僕ら若手は和気あいあいとすることも出来ず、職場は氷のように凍てついていた。

隣の現場の若手社員が、ウチの職場に寄ったとき、「信じられないくらい重たい空気で、息が詰まりそうになった」とボヤいていたくらいだ。

だから、他の同期を見る限り、確かに仕事はキツイだろうけど、雰囲気の良さはうらやましくて仕方なかった。

本当に職場の雰囲気とは、重要である。

やる気すら奪われるのだ。

様々な経験をしてきたから、少しは精神的に成長したであろう、今の僕も、あの場所に戻ったら、一週間で精神がおかしくなってしまうと思う。

久しぶりの研修は、信じられないほど楽しかった。

毎日5時には終わるし、夜は、毎晩飲み歩き、上司の悪口で盛り上がった。。

彼女とも久しぶりにゆっくりと電話することが出来たし、以前のように明るくなった僕に、彼女もホッとしたような安堵の声を洩らした。

しかし、この研修も、すぐに終わる・・・。

そう考えると、気分が悪くなる・・・

だが、楽しい時間はいつも、一瞬で過ぎ去るもの！

あっという間に夢のような一週間の研修は幕を閉じた。

さて、最高に楽しかった研修が終わると、帰ったときの地獄は数分も待たずに襲ってきた。

「おうおう、ペロさん、遊びは楽しかったか？」

帰宅した宿舎で、開口一番、測量屋のSが僕に嫌味を言ってきた。

「ええ、まあ・・・」

僕は早くこの場から逃れたい気持ちで、視線を逸らすと、Sはそんな僕の行動を楽しむかのように言葉を続けた・・・。

「お前がいなかった間、B君と一緒に行動していたけど、超楽だったよ。お前と違って、めちゃくちゃ仕事できるしな！いやー、お前がいないとずいぶん、仕事が捗るよ～！」

B君というのは、僕より5年早く入社した先輩社員で、確かに僕と比べて仕事は出来る。

だが、まだ入って半年も経ってない僕と比べるなんてどうかしている・・・

(うわ～、折角リフレッシュしてきたのに、早々に地獄が始まりそうだなあ・・・)

また、明日から始まる地獄の日々を想像して、僕は中々寝付けない夜を過ごした。

さて、帰ってきた僕は、またSとのコンビを組まされた。

迂回路工事もそれなりに終わって、やる事が無くなったからだ。

迂回路工事で、撤去工を経験したことをきっかけに、施工代理人から工事全体の撤去工を測量と共に、行っていくことを指示された。

またもや、毎日のように嫌味地獄が始まった。

「ほら、撤去工の始まりはどっからやるんですか？ちゃんと指示して、図面を下さいよ！」

「えっ、あっ、いや！ちょっと待ってください。何から手をつけていいのか分からないんですよ。」

いくら、迂回路で少し撤去工をやったからと言って、現場についての知識が全くない僕である。

他の工事も進んでいるし、撤去するための機械を入れる際にも、“ついで”で他の仕事も合わせて出来るように最適な順番で搬入しなければならないのだ。

どっから手をつけていいのか？

どのように段取りしていいのか？

施工代理人にある程度の指示をもらわないと、見当もつかない。

僕があたふたしていると、あきれたように溜息をついた。

「はぁ～、まずは、位置出しして、境界出さないといけないんじゃないんですか？」

「しっかりしてくださいよ！一応、正社員なんですよ？」

Sが、またも自分で既に理解していることを、さも偉そうに語ってくる。

撤去で気をつけないといけないのは、境界である。

工事を行える範囲というものがあらかじめ決められているから、その境界を侵さないように、邪魔なコンクリート構造物などを撤去していかなければならないのだ。

だから、最初にある程度、境界の位置出しを始めていって、次に着工予定の場所を重点的に、いつでも撤去できるように準備しておこうというのだ。

「えっ、でも、境界の座標って、どの図面に描いてあるんでしょうか？」

「それくらい、自分で調べてくださいよ！いつまでおんぶされているんですか？」

この憎たらしいくらい、敬語言葉が、めちゃくちゃムカついた。

座標が書いてある図面のある場所くらい教えてくれてもいいではないか！

もう、うんざりするようなやり取りが、冬に突入するくらいまで、この調子で続いた。

でも、今思うとSの言うことが正しい。

まずは自分で調べ、自分で考え、自分で答えを導き出す。

そして、それで本当にいいか？を上司に確認して、ミスのないように仕事をするのが本来の仕事なのだ。

僕は、新入社員だからと言って、すぐに人に答えを求めた。

だから他人ばかりに頼って、いつまでも成長せずに、一向に仕事ができるようになる気配がなかった。

でも、当時の僕はそれに気がつけず、ただただ、相手が最悪な奴なんだ！という思いだけで一杯だった。

上司に弄られながら、嫌々仕事をして、ミスを連発！

休日はパチンコで給料をすってんてん！

彼女には、また愚痴をもらすようになり、相手をないがしろにしてしまうという、最悪な悪循環だった。

僕は、ずっと仕事や現実から逃げることを考えていた。

工事現場というものは、途中途中に中間検査というものがある。

出来形検査や、数量検査を行い、工事の進捗状況などを確かめるためだ。

僕は、当然のごとく、迂回路と撤去の数量計算を任された。

設計図面に対して、実際に撤去した数量や迂回路で使った材料の数量を赤文字で記していく。

要は、設計図面に対して、実際にどう工事を行ったか？の確認である。

結構、簡単そうに思えるかもしれないが、半端じゃないほどの数量がある。

もう、死にそうになりながら、連日施工代理人と、二人の若手先輩と僕とで、書類を作りまくった。

実は、撤去工というのは、数量計算書を作成するのにも、段違いで面倒くさい。

なぜなら、普通の工事と違って、設計図面がないような地面に埋まった構造物などが見つかるからだ。

図面も書かなければならないし、なぜか、設計図面が特殊で読みづらかった。

実際に、トラックで運び出したコンクリートの数量と、図面上で出した数量との一致も必要なので、僕はワケが分からなくなり、頭がおかしくなった。

そして、いよいよ施主に数量計算書を提出する前日になって、計算書を確認すると、数量が合わない。

というか、ワケが分からない！

施工代理人が、若手みんなが出した数量計算書を確認しながら、僕の計算書を見たとき、

「おい！情熱！お前のコレ、どういう計算なんだ。よく分からん」

と言ってきた。

僕にすら、自分でワケが分かっていない。

「いや、途中でワケが分からなくなってきて・・・」

「ふざけんな。お前！明日は、中間検査だぞ！どうする気だ！」

「いや、朝までには、絶対に終わらせますんで！」

結局、一人事務所に残って、徹夜で仕事をする事になった。

翌日は、検査があるので、徹夜なんかしたら、日中倒れてしまう。

でも、やらないと、どうしようもない・・・。

泣きそうになりながら、一人ガムシャラに図面や計算書を見返しまくった。

すると、元々の計算書自体が、変な計算書になってて、読みづらくなっていることに気がついた。

(今から、この計算書自体を作り変えるなんて不可能だ・・・)

焦燥感と不安を抱えたまま、ひたすら頭の中で「何とかしなければ・・・」という言葉だけが繰り返された。

しかし、やろうと思っても、どこからどう手をつけて良いのか分からない・・・。

とにかくガムシャラに、仕事を続けていたが、連日ほとんど寝ていなかったのと、精神が限界に達してしまい、朝方になって、倒れこむように眠り込んでしまった。

「おい！情熱！お前、計算書できたのかっ！！??」

朝、入社してきた施工代理人が、眠りこけている僕に怒鳴り込んだ！

「うっ、うわぁっ！」

僕は、完成しきらなかった書類を思い出して、真っ青になった。

施工代理人は僕と書類を交互に覗き込むと、すぐに目の色が変わり、

「馬鹿野郎が！お前、今まで何してんだ！もう、その数量、今回の出来形で上げられないだろうが！」

そう怒鳴りながら、顔を真っ赤に染め上げて、物凄い剣幕で僕に迫ってきた。

でも、施工代理人が何を言おうが、もう時間がない……。

現場に出て、施主に工事の確認をしてもらわないといけないのだ！

施工代人は一旦時計を見ると、あきれたように

「もういい！さっさと、支度して、検査の準備をしてこい！」

と、冷たく言い放った！

もう、心臓をバクつかせながら、事務所を後にした。

検査の段取りは、かなり事前にSと練習していたから、何とか上手く乗り切った。

他の先輩達も、ちょこちょこミスはしていたようだが、何とか検査は通って、事なきを得たようだ。

その日も、ちょっとしか寝ていなかったから、検査も終わり、ホッとし、眠気を感じながら事務所に戻った。

今朝の出来事を忘れたまま・・・

「みんな、よく頑張った！今回の中間検査は、何とか乗り切れた！」

所長が、検査の終了をねぎらって、夕方の打ち合わせで皆に語りかけた。

全員の顔から、疲労感と安心感が漂う・・・

「今回が初めての中間検査で、疲れただろう。今日はゆっくりやすみなさい。みんな頑張ってくれて、ありがとうな・・・」

いつも厳しい所長の、珍しく優しい言葉に皆がお互いの顔を見回した。

そして、ホッとした安堵感から笑顔がこぼれだす・・・

と、次の瞬間だった。

「ただし、一人だけ、給料泥棒がいるな……」

みんなの動きがピクリと止まった。

僕は一気に、今朝の出来事が頭をよぎった。

「情熱！お前、何やってんだ？ああ？お前、仕事って何か知ってるのか？」

「何も仕事をこなすこともなく、たかがちょっとした数量の計算すら出来もしない。お前は大学を本当に卒業しているのか？」

「ちゃんと仕事をしろ！」

悪意のこもった鋭い眼差しだった。

もう、僕は、生唾を飲み込んで、胸が張り裂けそうになっていた。

あそこまで、頑張ったのに、まだ一年も経っていないのに……

なぜ、皆の前で、ここまで言われないといけないのか？

確かに、僕は要領が悪く、馬鹿で覚えが悪い！

でも、自分なりに、死ぬ気でやっているのだ。

残業を200時間を越えるくらいやっているのだ。

これ以上、僕を追い込まないでくれ！

もう、死にたくなるくらい、自分を恥じて、上司達を呪った。

その日の夜、みんなで、初めて日ごろの苦勞をねぎらう飲み会が開かれた。

普通は、普段のストレスを発散するために、月に一度は、現場の金で飲み会が開かれるのが、土木屋の楽しみでもあり、憩いの時間なのだが、ウチでは、赤字現場のため、所長が全然飲み会に金を出さなかったのだ。

案の定というか、ご想像通り、話題は、僕の使えなさ、ダメっぷりについて語る席だ。

お前のあれが悪い！これが悪い！のオンパレード。

もう、普段の食事の時間だけに飽き足らず、飲み会でも、ずっと説教を受けた。

確かに、僕が悪いことも多い。

迂回路の完成と共に、どこかやる気を失い、自分から仕事を避けるように動いていた。

だから、あまり夏から成長がなかったのだ。

さすがに、所長やら、施工代理人は僕についての駄目さは言ってこなかったが、Sが馬鹿にしまくっているのを見ても、何も言ってくれなかった。

忘れているかもしれないが、Sは派遣社員だ！

たかが派遣が、正社員である僕を、これでもか！といじめている。

僕は死にそうな顔をしているのに、何も救ってくれなかった。

これが会社ってもんなのか？

これが、社会っていう厳しさなのか？

僕には、どうしても納得がいかなかった。

普通の現場だったら、僕と身近な先輩である、一個上の先輩や五個上の先輩が、もう少し話を聞いて、励ましてくれたらう。

けど、先輩達も、尋常じゃないくらいの仕事を与えられていて、僕なんかをかばっている余裕はなかった。

公式的な、飲み会が終了した後、Sが、若手だけで飲みに行くぞ！と僕ら若手三人を連れて、キャバクラのようなものに行った。

「お前はさあ……」

女性がいる前でもお構いなし！

Sはまた、僕の悪口を始めた。

いくら僕でも、同じような年齢の女性の前で、自分を辱められるのは耐え切れない！

僕が、ちょっと現場に対する考え方を意見したとき、Sが、「お前みたいな、新人カスに何が分かる！」と言われた瞬間、僕はついにキレた！

「てめえ、うるせえんだよ！新人は、意見すら言っちゃいけないのかよ！」

怒りが体中を包み込んで、気が付いたら椅子を蹴っ飛ばして、Sの襟を掴んでいた！

席にっていた女の子達が小さく「キャッ」と叫んで、お店も喧嘩が始まったのか！と一瞬静かになった。

(しまったやり過ぎたか！)

心と我に返ると、一気に冷静な感情が戻ってきて、「報復されてしまうんじゃないだろうか？」という嫌な考えが脳裏をかすめた。

しかし、Sをサッと見ると、若干ひるんでいた。

というか、何かぶつぶつ言いながら、店から出て行った。

何か言われるのではないかと身構えていたのだが、何ていうことはない、僕が、ずっと大人しく言いなりになっていたから、僕を見下しまくっていただけだった。

ちょっと、反抗されると、シュンとなる。

強い者には、何も言えず、弱いものだけに偉そうにできる、そんな小心者だったのだ。

Sの件はそれからしばらくは何もなく、いつもの悪口は収まっていった。

しかし、現場はというものの、それから先は、もっと最悪になっていった。

現場は相変わらず上手くいかず、僕を含めて先輩達もミスをし、一度作ったものを取り壊す！ということが、多発した。

一回作ったものを壊すのだから、当然、より多くのお金が損失されていく。

ただでさえ赤字の現場なのに、もっと赤字になって、職場の雰囲気は更なる重たさを、かもし出すようになったのだ。

所長は、高齢だったから、引退間近で、やたら見た目だけを気にして、僕らに無理難題をふっかけ、余計な仕事をドンドン増やした。

やれ、看板が曲がっているだとか、やれ、バリケードが曲がっているから直して来い！だとか、もう、お前が一番暇なんだから、お前がやれよ！と言いたくなるほど、どうでもいいことばかりを社員にやらせるようになった。

こんなの二、三人の人夫(雑用の力仕事をする労働者)を雇って、やらせばいいのだ。

新入社員の僕でも分かる。

だから、社員が本来やるべき仕事に集中出来ず、ミスが連発するのだ。

完全に、自分の引退への花道を飾る”見た目”にしか、注意が向いていない。

施主は施主で、異常なほど細かく、普通なら流されるような工事の出来形も、めちゃくちゃ文句を言ってきた。

2.4kmもある、工事の土の中にゴミが混じっているから、全部拾えとか、鉄筋にわずかな錆がついているだけで、他のも怪しいから、全ての段階で検査させろ！とか、とにかく何から何まで検査を行う、異常な連中だった。

もう、検査の準備だけで時間がめちゃくちゃ失われるし、工事は進まないし、ミスは連発するしで、悪循環の塊だった。

最初の頃とは、メンバーは入れ替わっていたが、仕事をしない、年ばかりくった上司達は、僕を標的にそのストレスをぶつけまくった。

若い施工代理人から使えないレッテルを押され、仕事を振られるのに少なくとも面白さを感じなかったのだろう。

僕のどこが悪いだとか、生意気だとか、くだらないことばかりで、僕をけなしまくっていた。

そんな、若手社員の悪いところばかりを言ってる暇があったら、7時くらいに職場を離れて飲んだくれずに、現場のどこを改善すべきか？考えてくれたらどうだろうか？

少なくとも、あんた達は、小言を言うのが仕事じゃないはずだ。

施工代理人も、本性を表しだして、僕らを毎日説教した。

毎日毎日、夜中の2時、3時まで、2,3時間だ。

当然、一番負担がキツく、部下がほとんど自分より上の先輩なのだから、僕らにストレスをぶつけるしか、場がないのは分かる。

でも、もう、いじめ方が半端じゃないのだ！

お前は、何年目だ？

その頃の俺はこうだったぞ！

隣の〇〇君は、既にこんなだぞ！

あの仕事はどうなった？

まだ終わっていない？

全然仕事量が少ないのにも関わらず、これくらいもできないの？

お前らは駄目だ！

それじゃ、駄目だ！

駄目だ！

駄目だ・・・・

僕ら若手三人は、最初、Y氏の凄さを認めて尊敬していたのだ！

怒ってくれる内容も、至極まっとうだし、成長させてくれようとしていると、信じていたのだ。

しかし、ドンドン、ストレスを発散させるためだけに怒っているのが、僕らでも分かるようになる。

もう、嫌なところばかりついてきて、S以上にネチッコいのだ。

しかも、よくよく一緒にいると、分かるのだが、Sみたいに、強い者に弱い！

明らかに、上の者に逆らえず、弱い者をいじめ抜く。

この後更に、その器の小ささが明らかになっていった。

僕ら、若い衆は、彼の精神攻撃に死ぬほど苦勞をさせられた。

もう、その頃になると、僕は彼女と、ほとんどメールをやり取りしなくなった。

というか、やり取りしようにも、仕事に集中しないといけないから、メールを打つのが面倒臭くなったのだ。

あの頃に染み付いた、メール打つのは面倒くさいという精神は、今も僕に染み付いていて、誰とでもメールはほとんどやらずに、電話で済ましてしまう。

心配していた通り、僕は仕事人間になっていたのだ。

そして、ある日、彼女がこうやってきた。

「今度合コンあるんだけど、ちょっと行ってもいい？」

最近ではメールもあまり出来ないし、たまには生き抜きも必要だろうと思い、「いいよ！いつもストレス抱えさせて悪いよね」と一言いった。

多分、これがいけなかった。

それから、二ヶ月ほど経って、突然彼女が、「別れたい」と言ってきた。

電話越しの彼女の声は大学の頃に比べ、ひどく冷たいように感じられた。

「なんで？他に好きな奴でも出来たの？」

もう、仕事でもいつも怒られ、ボロボロだったのに、唯一の支えである彼女すら失ったら、僕は精神が完全に崩壊する。

胃をキリキリ痛ませながら、別れる理由を問いただそうとした。

「いや、他に好きな人ができたワケじゃないんだけど、色々考えて……」

いくら理由を問いただしても、なんとなくフワフワした感じで、はっきりした理由は聞けなかった。

ただ、僕とはもうやっていけないというばかり……

今までも、何度か喧嘩して、お互い納得しあってきたじゃないか？

なぜ、いきなり……？

「分かった！とにかく、今は別れてもいいから、ちょっと考え直してみてくれ！一ヶ月後に地元に戻るから、そこで、実際に会って話そう！」

「うん、分かった……」

そう話して、それっきりだった。

メールをしても、そっけなく、会う約束をしていた日も、普通に返事が来ることはなかった。

そして、その後、彼女のフェイスブックを見たとき、全ての理由が分かった。

既に、新しい男と付き合っていたのだ。

付き合った日付も書いてあったから、僕に別れると言って、多分一週間も経っていなかっただろう……。

僕は、完璧に壊れた。

もう、筆舌にし尽くし難いほどの絶望感が襲ってきた。

この地獄のような、仕事を行いながら、何を目標にして生きていくのだろうか？

というか、この仕事を続ける意味は何なのだろうか？

完全に生気が失われ、他の人の話す言葉が聞き取れなくなった。

しかも、丁度、僕と二人、九州支店に配属されていた同期が僕の現場に入ってきたのだ！

彼も、僕と同じように、仕事が出来なくて、前の現場でいじめられていたそうだが、僕があまりにもふさぎこんでいたので、比べられて、けなされた。

やさしくしてもらっていた、他の測量士さんにも、愛想を尽かされ、誰にも相手にされなくなった。

周りは全部敵、自分は一人、何もこの先、楽しみはない。

胸の中が完璧に空白になった僕は、休日はパチンコに逃げ、酒を浴びるように飲むようになった。

もう、いつ、解雇されてもおかしくない！

それくらい、仕事も上手くいっていなかった。

「死にたい……」

僕は、それまで絶対に電話をしたくないと思っていた相手がいた。

それが、冒頭でも説明した、小学校からの友人のTだった。

お互い、競い合ってきたし、認め合ってきた。

ある意味、弱さを一番見せたくないライバルだったのだ。

でも、限界だった。

コイツだけには、今の自分を見られたくないというプライドすら忘れ、初めて社会人になって、連絡した……

「もしもし？」

「おう！自由人か！久しぶり！」

「……」

「元気か？仕事上手くいってる？」

「……」

「どうした、上手くいっていないの？」

「……もう死にたい……」

「……」

「どうした？なんかあったの？」

僕は、今までの経緯を全部話した。

仕事が上手くいかないこと、ブラック職場で精神が持たないこと、彼女に振られ、うつ状態になっていること。

その全てを洗いざらい打ち明けた。

黙って僕の愚痴や、気持ちを聞いてくれた後、彼は一言こう言ってくれた。

「お前ほどの男がここで終わるはずが無い！」

この言葉を聞いたとき、僕は本当に救われた。

嗚咽を漏らして、泣くのを必死でこらえた。

もう一度、やり直そう！

もう一度、頑張ろう！

もう一度、自信を取り戻そう！

自分が心から認めている男のたった一言で、自分の中に、新しい火のようなものが生まれたのだ。

僕が、うつ状態から抜け出した後、Tに聞いたら、まるで別人のようだったそうだ。

人は、極限状態まで落ち込むと、人格そのものを変えてしまう。

特に、頑張り過ぎてしまう人ほど、それが崩れたときに精神を保てなくなるのだ！

だから、僕は、行き過ぎた会社の仕打ちや、ストレスを感じすぎる人間関係を絶つために、本当に耐え切らないことは逃げていいと思っている。

大体、会社どころか、仕事をする事すら出来なくなる可能性もあるし、下手すれば、自殺してしまうからだ。

僕が、ギリギリの精神状態で、もう一度頑張ろうと思えたのは、奇跡に近い。

彼がいなかったら、間違いなく、失踪していたか、死んでいただろう。

他人がどう思おうが関係ない！

自分が、限界だ！と感じたら、本当に恥じることなく逃げて欲しい！

いや、限界を感じたら、既に遅いかもしれない。

明らかに、おかしいと感じた時点でも会社を辞めて構わない。

よく、親や、周りは石の上にも三年とか言うが、ほっとけ！

人は人、自分は自分だ！

まず、優先順位は、自分の命だと思って欲しい。

自分を変える！

さて、もう一度頑張ることを決意した僕だったが、いくらやる気が戻ったからと言って、能力は変わらないのだから、今のまま仕事をして、何も変えられないだろう。

自分なりに仕事の仕方というのを見直すことにした。

すると、コンビニエンスストアで立ち読みをしている際に、たまたま「断捨離」という本が目についた。

「不思議なくらい、心がスーッとする・・・？」

この本は、今本当に必要なもの以外、余計な物を捨てて、モノからの執着をなくす！ということを目指した、片付け術を記した本だった。

365日が変わる・・・その言葉にも、ちょっとした希望感が沸き、早速購入してみて、実践することにした。

まず、部屋に戻って、自分の荒れた部屋の片付け！

片っ端から、今の自分に不要なものを捨てまくった。

洋服、レシート、使わないカード、文道具、漫画、彼女との思い出・・・

もう、捨てるに捨てまくった。

本には、初心者は、ちょっとずつと書いてあったが、僕は、早く何とかしたかったので、休日丸ごと使って、ほぼ全ての要らないものを消し去った。

すると、なんということだろうか・・・

あれほど、心に淀んでいた空気というものが、信じられないくらい消え去ったのだ。

僕は、「これは凄い！」と、めちゃくちゃに溜まりきっていた会社の書類関係も、捨てるに捨てるまくった。

もう、信じられないくらい大量に必要ななかった書類が出てきた。

バインダーも一気に、10個くらい空になって、仕事場のデスクが、見る見る内に綺麗になった。

すると、なぜだろうか？

一気に、今の自分がやるべき仕事が、明確になってきた。

要らないモノを仕分けたことで、どんな仕事が自分の与えられた課題なのか？ハッキリ区別できるようになったのだ。

多分、莫大過ぎる仕事を与えられたことのある人は分かってもらえると思う。

やるが多すぎて、自分でも何をやったらいいいのか、分からなくなっているのだ。

この『断捨離』に出会えたことは、本当に幸福だった。

僕は、今ではあまり断捨離を行わないが、情報の取捨選択、様々な出来事の優先順位などの決定が、一瞬で出来るようになったのだ。

モノを捨てるにも、決断力が要るし、自分で物事を判断しなければならない。

そして、それに慣れてくると、人生における決断力というものが付いてくる。

結局、今までの僕は、全ての物事において、決断しきれていなかったのだ。

だから、仕事においてもどうするか？の決断をしっかりとやりきれていなかったし、行動に迷いが出ていた。

自分でしっかりと、行動に決断を持ってない人は、まずは捨てるモノを決断する行動から始めてほ

しい。恐らく思った以上に自分の中の優柔不断さが消えるはずだ。

更に、これに加えて、僕はシンプルリストという本を手に入れた。

これは、自分に必要なことをメモ帳やノートにまとめ上げ、リスト化していく本だ。

これまた、僕にとって大きな力を与えてくれて、絶対に仕事を忘れない、頭を整理してくれる補助道具となった。

最初の頃は、とにかく自分の今の気持ちや、プライベートでやるべき雑務、大切にしたい大事なことなどを書いていった。

たったコレだけをリスト化しただけで、自分の頭と言うものがかなり整理された。

客観的に自分を良いほうに考えられるようになったのである。

例えば、『彼女に振られて、心が痛い』など書いていたら、

嘆いても仕方ない、どうしようもならない！という簡単な答えが見えて、堂々巡りの悩みの無意味さを、客観的に見て、自分に思い込ませれるようになった。

まあ、完全に癒されることは無かったが、頭の中だけで考えるより、紙に書き出して感情を合理的に整理する方が、よっぽど気持ちが楽になったのだ。

更に、紙に自分の気持ちを書き出していくうちに、自分の中で、たった一つの基準というものを持たないといけないことにも気がついた。

断捨離の説明のときにも少し触れたが、人生は決断の連続である。

だから、何か迷ったときに、「自分がどういう方向に進むのか？」を自ら決定しなければならな

いのだ。

僕は、『カッコイイ方向』にしか自分が進まないことを、決断する時の指針に決めた。

例えば、上司に怒られて、シュンとなってしまうのと、見返してやろう！とキツとなるか？

当然、後者の方がカッコいいに決まっている。

このように、一時の感情に振り回されることなく、決断の際に考えられるパターンを論理的に考え、どっちが生き方として、カッコいい選択になるか？考えるようにするのだ。

これは、すぐにできるようなものではない。

とにかく、紙に自分の気持ちを色々書き出してみて、理想の自分と照らし合わせてみるのだ。

シンプルリストでは、今の自分の気持ちと、こうなりたいって自分の気持ちを両方リストに書き出す作業がある。

要は、どちらが、カッコいいか？を自分自身で理解させるためのものであろう！

翻訳されたものなので、若干理解しにくい向こうの人の感覚というものが含まれるが、本質的な部分でこの本から学ぶことは凄まじく大きい。

他にも、色々昔決めたことがリストにある。

もし、仕事や人生が上手くいっていない人がいたら、参考にしてみしてほしい。

- 迷ったら、カッコイイ選択肢を選ぶ。
- 一度やると決めたことは、必ずやり切る。
- 言い返せないなら、黙ってやる。

- やらないなら、言い返せるだけの理論を完璧に導き出す。
- 物事は一つ一つ完全にけじめをつける。
- 喧嘩することを恐れない。
- やる気があるか？ないか？ではなく、とにかく、すぐに始める。
- 与えられる雑務は、すぐ出来るものは、すぐにこなす。
- 勉強しないといけないなと思ったことは、記しておいて、後ですぐに勉強する。
- やると決めたことは、日時、時間まで記しておいて、かならずその時に行く。
- ダラダラせず、とにかく素早く行動する。
- 言い訳は絶対にしない。
- 愚痴は言わない。
- 完全に物事がイメージできるようになるまで、徹底的に勉強し、調べつくす。

さて、上記のようなルールを自分に課すようにし、仕事で与えられたものも書き溜めるようになると、段々と僕の仕事能力は上がっていった。

最初は、決めたルールを遵守出来なかつたりもしたが、そういった失敗もまた、紙に書き出し、なぜ自分はこういう風なのか？それはカッコイイ男なのか？などの自問自答を繰り返し、ドンドン自分を修正していった。

そして、仕事がある程度順調に進み出すと、不思議と自信とプライドが甦ってきた。

俺ならできる、しっかりと一つ一つのことをやっていくんだ！と、社会人になって、初めての充実感を感じるようにもなった。

すると不思議だ。

あれだけ周りに馬鹿にされていた僕なのに、周りの人から一目置かれるようになってきた。

まったく使えない、酒飲み上司達から無駄な雑用を僕に振っているのを見ると、管理技術者や所長が「情熱は忙しいから、そんな仕事は振るな！」と言ってくれるようになった。

※この時の所長は最初の人と代わっています。

この後、僕の担当していた現場で約一億五千万円相当に値するミスが起きたが、「所詮、人の金だ！自分は精一杯やり遂げた」と、決して落ち込まなかった。

まあ、この糞所長には、すべての責任を僕に押し付けられそうになったが・・・

「お前は変わったな・・・」

一個上の先輩がこう言った時、僕は自分でも自身の成長を実感した。

可愛そうだったのが、丁度、僕が自分を変え始めた時に職場を移ってきた同期の奴である。

僕が結構仕事が出来るようになってきたこともあり、逆にいじめられるようになっていた。

確かに、彼自身もミスばかりを連発していたし、頼りない部分がかかなりあったのだが、雑用だけを三年目に突入した後もやらされ続けたのである。

なんと、2.4kmの工事現場のガソリン補給係、これが、彼の仕事になったのだ。

僕も、断捨離やシンプルリストを教えてあげたり、色々仕事のやり方を教えたのだが、やっぱり駄目だった。

所長から見放され、どこか遠くの現場に飛ばされてしまった。

同期の移転以外にも、現場はドンドン様子が変わってきた。

新しく出来る人間が、送られてきて、全く仕事をせずに酒ばかり飲んでた上司達は皆、他の現場に飛ばされるようになった。

今までの停滞が嘘のように、現場が動き出し、飲み会の量や、笑いが起きるようになった。

もうSなんか、僕の眼中には入らなくなった。

最初は、物凄く怖く、自分より、何倍も仕事ができると思っていたが、氷山の一角を見せられて
ただで、実際、大した事ない奴だと後で分かったからだ。

ただ、Y氏の夜の説教だけはずっと続いた。

めちゃくちゃウザくて、しつこかった。

自分は、お前らの何倍も仕事をしている。

お前ら、もっと仕事しろよ！的なことばかりを言っていた。

もう、すっかり僕らは、尊敬の念を失っていたように思う。

何よりも、Y氏を僕らがガッカリしたのは、「守ってくれない！」という部分だと思う。

普段は、めちゃくちゃ偉そうに語るくせに、僕らが業者や施主と揉めると、守ってくれないのだ
。

お前の言い方が悪いだの、お前のここら辺の準備が出来ていないせいだ！だの、なんだかんだ言
って、外部と揉めるのを避けたがる。

普段、偉そうに色々言って、仕事をやらせるのだから、ちゃんとその辺の上司の仕事はしろと言
いたかった。

僕は、一個上の先輩とは仲が良かったし、めちゃくちゃ世話になっているので、今も連絡を取り
合うのだが、未だにあいつは最悪な野郎だったと、あの時を話し合う。笑

先輩は他の現場で今も仕事を続けているが、Y氏以上に最悪な人間には出会ったことがないそうだ
。

僕は結局、この建設業界を辞めている。

そのきっかけになったのも、Y氏と所長が大きな原因となった。

僕は、先ほども述べたように随分と調子が良くなった。

全部自分で段取りをつけ、工程を組み、工事を進められるようになったし、いくつもの現場を一人で見られるようになった。

プライベートも充実してきたし、他に彼女も出来た。

ただ、徹底的に、この会社は駄目だ！と思える出来事が、一つ起きた。

それが、そのY氏と所長の社員による裏切りだったのだ。

その時、僕は入社してから二年半が経っていた。

高速道路の盛り土を補助するための、ブロック積み工という工事を担当していた。

ただ、地面に穴を掘って、基礎を作り、ブロックを積み上げながら、コンクリートを流し込むという、作業自体は簡単なものである。

だが、ここで事件が起きた。

業者の作った基礎や、コンクリートを流し込んでいる際のバイブレーターの突き固めが甘すぎたのである。

コンクリートというのは、固まる前はドロっとした液体だから、バイブレーターで振動させ、まんべんなく全体に広げさせる必要がある。

そうしないと均一に混ざることがなく、強度の弱いコンクリートが出来てしまうのだ。

だから、僕は、どれくらいのバイブレーターによる突き固めを行うか？なども指示しておいたのだが、それを無視して、適当な仕事を行っていた。

他にも色々指示とは違うことばかりを勝手にやって言うことを聞かなかったから、これは駄目だと、業者を呼び出し、話し合いを行うこととなった。

「何でやれって言ったことをやってくれないんですか？知っての通り、ウチは施主が厳しいんだから、ちゃんと出来ないと、また取り壊しさせられちゃいますよ？」

「いやいや！ウチはちゃんとやっているから！お宅が、上手く検査を通るように調整してくださいよ！」

実は、昔からこの業者とは揉めまくっている。

はっきり言って使えないのだ。

レベルも低いし、文句ばかり言うてくる。

普通なら、即退場の業者なのだが、赤字の現場であることと、複雑な事情が絡みあい、結局、最後までこの現場の足を引っ張っていた。

「もう！お前ら、この現場に来るな！要求する仕事ができないんだったら、辞めちまえ！」

何時間も話合ったが、ぜんぜん拉致があかず、最終的には、僕は我慢がならず、切れた！

しかし、向こうは、若いから僕を舐めてるんだか、釈然としない回答を返してくる。

「もう、拉致があかん！情熱君、上司に言って、代えてもらいなせえ！」

これ以上、この業者とはやっていけないという判断を下し、Sとは違う、僕と一緒に仕事をしてきた測量屋さんが、業者を無理やりにでも引き離してもらうことを提案してきたのだ。

勿論、僕もそれは考えてはいた。

だが、それは、あの上司達にお願いすることである。

はっきり言って、奴らが外部に対して強い態度を見せられず、僕らのせいにするのは今までの経験で分かっていた。

今度のことは明らかに業者が悪い！

でも、今までもそれで解決せず、自分たちが嫌な思いや、苦しくなる解決方法しか提示されたことがなかったのだ。

かなり前は、業者が駄目だったら、自分たちで見本を見せてやれ！とか言っていたくらいである。

(※通常、下請けはその工事のプロなので、ゼネコン側が直接工事を行ったりするのはご法度です。)

しかし、僕も、めちゃくちゃブチ切れて、相手に、「帰れ！」とまで言ってしまった。

仕方なく、Y氏と所長に、業者と揉めたことを話し、業者を代えてもらうことを提案した。

彼らは、ずっと一発で仕事を決めろ！ミスをするな！後戻りしないようにチェックをし続けろ！そう言っていたから、今度ばかりは業者の至らなさ過ぎる部分を理解して、僕の提案を受け入れてくれる、あるいは、僕の気持ちを理解して、「気持ちは分かるが・・・すまん・・・」と気持ちを和らげようとはしてくれる！

そう思っていた。

しかし、返ってきた返事はこうだった。

「お前の指示の仕方が悪いんじゃないの？あと、言い方が悪い・・・さすがに、帰れはないだろう？」

マジで、「はぁ？」となってしまった。

おいおいおい！

今までの、説教はなんだったんだよ？

お前ら、施工の際のミスとかは、しっかり怒れ！とか言ってなかったっけ？

こっちはチェックもしっかりとしているし、施工方法なんか、これまで何度も指示してきているよ！

メモすら取ろうとしない奴らに、これ以上どうやって仕事を教えるんだよ！

Yとか、所長は、いつもは論理で攻め入ってくるくせに、こういう時ばかりは、感情に訴えた「言い過ぎ」とか「言い方が・・・」とかの子供じみた言い訳を始める。

はっきり言って、のらりくらりとかわすことだけが上手いのだ。

もう、頭にくるを通り越して、半ばあきれ返ってしまった。

相方の測量屋さんに話すと、

「もういいよ情熱君。ここは腐りすぎている。君はここを辞めなさい。」

こう言い放った。

その夜、僕は、この現場では仕事すらしたくないと考え、自分で昔書いた辞表を机から取り出した。

いつでも辞められるように、一年以上前から用意している、もう、お守りみたいなものだった。

先輩に話を聞くと、早々と仕事を切り上げて近くの居酒屋で飲んでいるという。

一目散にその居酒屋を目指して、走っていった。

息を途切れさせながら、居酒屋さんにつくと、既に周りは暗くなっていた。

店からこぼれた明かりが真っ暗になったアスファルトの一部を照らし出し、なんとも言えない哀愁を漂わせていた。

僕はしばらく、ぼんやりとその照らし出されたアスファルトを見つめながら、荒くなった呼吸を落ち着かせた。

ガラガラ・・・

居酒屋のドアを開けると、所長と、僕より10歳くらい年上の先輩とが二人してカウンター席で、飲んでいる。

僕が入って来たことに気が付くワケもなく、所長は真っ赤になった顔で嬉しそうにお酒を飲んでいる。

(若手は皆、今も仕事しているのに・・・)

心の中でそう思った。

その瞬間、僕は急に所長やY、この現場で偉そうにしていた人間達が、ひどく小さな存在に思えた。

この種の人間は、自分の人生に満足することなく、誰かに誇れる自信もなく、自分より弱そうな人間を見つけては攻撃することで、自分の自尊心を保ち、自分の小さな世界を守っていくんだろ
うなあと感じたのだ。

そして、そんなちっぽけな存在の人間に、今までコキ使われて、死ぬ気で働いてきたのが、馬鹿
らしくなった！

怒りが沸いたのだ！

僕は、二人の下に歩みよって、辞表をテーブルの上に叩きつけ、こう吐き捨てた。

「所長！俺、辞めます！」

普通なら、目を丸くするような事態だと思う。

だけど、ウチの現場は、普通に何人もの人間が辞めていっていき、失踪する人間もいたくら
いだ。

特に、二人共、驚くような様子ではなく。

「馬鹿！お前、こんなところで出すな！」

と、所長が言ったキリだった。

その後のことは良く覚えていない。

所長のところに一緒にいた先輩も、既にその現場が終わると、別の会社に転職したし、所長も現場務めを辞め、安全課なる支店勤めに移動していた。

結局のところ、全員あの現場から逃げ出したいくて仕方なかったし、いつ、誰がこの現場からいなくなっても不思議ではなかったというのだけは言えたのだろう。

とにかく、僕は、その現場から二年半という歳月をかけて、旅立つ決心をしたのだった・・・

新しい人生を目指して動き出す

はっきり言って、僕はもうこの仕事を最初から辞めるつもりだった。

仕事が出来るようになってからも、そんなに興味がなかったし、魅力を感じていなかったからだ。

あの落ち込みに落ち込んだとき、「三年経ったら仕事を辞めてやる！」と決めていた。

だから、ある意味いい時期である。

ただ、辞めようにも、転職がまた怖い。

どういう道に進んだらいいか？また、他の場所で最悪な場所にぶち当たったらどうしようか？

なんとなく、漠然とした不安だけが付きまとっていた。

ただ、辞表を出した後だったから、後には引けないことだけは分かっていた。

所長には、支店に話すからしばらく待っておけ！とだけ言われていた。

事務所に戻ると、施工代理人が、

「情熱、お前、せめてこの工事が終わるまで頑張ったら？」

とか言ってきた。

しらじらしい！

誰のせいで、こう決断したと思ってやがる。

お前のせいで、辞めた人間は他にもいるんだぞ。

心の中でそう思った。

とにかく、引継ぎ用に書類の作成が次の日からの自分の仕事になった。

施主にも一応挨拶したが、いがみ合っていた割には以外にも、

「まあ、この現場でよくやってきたな」

と、ウチの上司達より、上司らしい言葉をかけてもらった。

仲のよい業者さん達には、色々ご馳走にも連れて行ってもらったし、タバコの選別とかいってワンカートン貰ったりした。

みんな、良かったな！と、まるで刑務所からの出所のような感じの言葉を掛けてくれた。

辞表を提出してからしばらく経って、所長から意外な言葉が出てきた。

「他の現場に行ってみないか？」

支店も、この現場の最悪さは実は理解していた。

僕は、入社してからずっと、その現場だったし、ある程度仕事をこなせる人材になっていたのは分かっていたのだろう。

こういう自慢気な言い方は好きではないが、本当に通常の三年目よりは仕事が出来たと思っている。

だから、苦しかった時に、移動をお願いしても動かさなかつたくせに、今更になって、手放そうとしない支店にも結構腹は立った。

しかし、冒頭で述べたように、何をしたいのか？自分でも分からず、転職に対しての不安があった。

だから、結局僕は、別の現場で仕事をしながら、自分のやりたい道を探すことにした。

ある程度、現場の引継ぎが終わると、僕の新しい工事現場が教えられた。

〇〇という山奥でのトンネル工事である。

トンネルの工事は初めてだったが、やったことのない工種をやらされまくっていたから、自信はあった。

噂によると、今度は広島県のドンと呼ばれていた凄腕の所長が来るらしかった。

社内ホームページで、顔を確認すると、そこにはヤクザのような人間がそこに映っていた。

「勘弁してくれよ・・・」

また、怖い所長と仕事をするパターン。

九州支店のドンで終わりかと思っていたので、心底嫌な気持ちになった。

しかし、嘆いても仕方がない。

以前の職場で培われた、圧倒的な自信を持って新しい現場に移動することに決定した。

特に、現場の移動が決まってからは、大きな問題が起こるでもなく、スムーズにクソ現場を後

にし、僕は宮崎県の日南という所に場所を移した。

はっきり言って、スーパーと生活必需品売り場しかないような廃れた町だった。

たかが、食べ物一つ買いに行くにしても車でも30分以上かかった。

でも、以前の現場と違って、部屋は完全に個室だった。

飯も自分で作れるし、何より、一人っきりの時間が謳歌できる。

嫌いな上司の顔を毎日見ないで済むのが、何より心地よかった。

現場は、施工代理人にHさん、電気関係でMさん、あと、初めての後輩でN君というのが僕を交えた構成メンバーだった。

Mさんは若干怖めだったが、施工代理人のHさんは超絶優しく、僕に現場のお金で家事道具を揃えてくれた。

N君もかなり性格の良い子だし、別の厳し目の現場で鍛えられていたから良く動いた。

「信じられないくらい快適だ。」

それが、僕の感想だった。

やがて、広島のドンのI所長がやってきた。

みんな緊張の面持ちで、そのお迎えに出かけた・・・。

クラウン車がキッと止まり、その所長が降りてきた。

鋭い目つきに、金縁メガネ！

白髪が織り交じったオールバックに、首には金のネックレス！

背は低い、60歳を越えるとは思えない、ガッチリとした体格だった・・・

(うわぁ・・・)

どう見てもヤクザである。

後輩は、顔が引きつりまくり、超絶ビビっていた。

「はじめまして、広島から来たIです。宜しく頼むな！」

ドスの利いた、しゃがれた声で所長が挨拶された。

(これから大変だぞ・・・)

全員の人間が同時にそう思ったのは、言うまでもない・・・。

しかし、予想に反して、Iさんは最高の上司だった。

怒るときは怒り、普段は何も言わない。

抜きどころと、締めどころを完璧に理解した上司だった。

65歳を超える年齢にも関わらず、現場にも直接来て、僕らにも指示を与えてくれた。

わざわざ、所長が僕らの測量まで手伝ってくれたのだ。

「情熱・・・、部下と一緒に戦ってくれる上司が、本当の上司だぞ！」

僕が前の現場の話をした時、このような言葉を掛けてくれたのも嬉しかった。

「これが本物の男だな・・・」

最初の心配はどこへやら、僕ら全員が、Iさんを気に入っていた。

所長は、何度も僕らを焼肉食べにも連れて行ってくれた。

A4のお肉なんて、生まれて初めて食べさせてもらった。

工事も順調、残業も60時間もない・・・

でも、やっぱり僕は不満があった。

建設業の仕事が嫌だったのだ。

なんとなくでしかないが、自分に求める世界はここには無い！

もっと、やりたくて仕方がない、毎日がイキイキできるような仕事をしてみたいと思った。

そんな時、本屋を回っていると、一冊の本が目にとまった。

「本は10冊同時に読め！」という本である。

本を沢山読め、

あらゆるジャンルのものを読み、

クリエイティブな仕事をしろ、

など、とにかく本を読むことを推奨しまくっている本なのだが、かなり僕の心に突き刺さった。

著者は成毛眞さんといって、元日本マイクロソフト社の社長さんである。

あまりにも、その本に惹かれてしまったため、それからというもの、成毛さんの本を集めまくった。

「大人げない大人になれ」、「この無駄な努力をやめなさい」など、今までの僕の価値観を根底から覆す内容ばかりの本だった。

努力はするな！

頑張るな！

遊びまくれ！

ふざけまくれ！

と、とにかく今までの僕とは正反対のことを推奨していた。

この本に書いてあることの全てが正しいとは思わない！

ただ、現在の僕を形どる基礎は、間違いなくこの本から生まれた。

僕は、成毛さんに憧れ、マーケティングをやりたくなった。

かなりの上級職だし、人の心を理解し、動かせるように何かを生み出すのは、物凄く面白そうに思えた。

何よりも、こういった人間の生き方に憧れたのだ。

自由に仕事をし、心から楽しんで生きている。

人生を謳歌するとは、まさにこういった生き方が出来ている人だと思った。

僕は、早速マーケティング関係の仕事について調べることにした。

本をいくつも買い込み、建設業で培った、『イメージできるまで情報を収集し、仕事を行う流れを掴む』というのを徹底的に実行した。

実際にやってみると、やっぱり面白い！

僕は、建設業でも計画を立てる仕事が一番面白かった。

自分で物事の大事な部分を捉え、そこをはずさないように、自分で”仕組み”を企画する時が、最も充実したのだ。

だから、物を売るためにはどのように魅せればいいのか？ユーザーは何を望んでいるのか？を考えるのは、物凄く楽しかった。

そんなある日、日南市で、過疎化した町を再生させる『町おこし』的なものを行う市のプロジェクトが発足した。

市が直接、町を再生するプロジェクトリーダーを一人選抜し、その一人に企画から実行指揮まで全て執ってもらおうという訳である。

何と、一ヶ月の給料は90万円！

日南市に四年間住み込んでのプロジェクトだった。

僕は、かなり心が躍った。

なんて魅力的なんだろう！

偶然、仕事中にラジオで拾った募集のお知らせだったが、僕はすぐに応募を決意し、課題として与えられていた、1600字文字程度のレポートを書き上げて応募した。

僕が書いた内容は、過疎化した町にもう一度若い人を呼び込むために、イルミネーションを設置したり、安くで住めるホテルを建設するものだった。

20店舗の新しいお店の誘致が大きな市の目標だったので、まずは、それを行う前に人が集まる環境を整え、そこの利益が出そうな段階で誘致を行うようにしたらいいという算段だったのだ。

ちゃんと、町の状態も把握していたし、日南市の人口や家族構成など、下調べを行ったうえでのアイデアだったので、自分では自信があった。

しかし、というか、やはり！というべきか、僕のレポートは一次審査を通過しなかった。

実務経験がないことと、結果を残した実績がない。

僕の膨らんだ想いは、一瞬でかき消されてしまったのであった。

ただ、やっぱり行動に移した後でも、このマーケティング関係の仕事は最高に面白いということだけは分かった。

自分で情報を収集し、アイデアを出し、企画を立てる。

それが実現し、大きな結果を残したとき、どんな達成感を味わえるだろう・・・。

それを考えただけで、気持ちがワクワクした。

僕のやりたいこと、転職すべき道が見えた。

後は、マーケティングの仕事が出来る転職先を探すだけである。

「よし！絶対に自分が好きだと思える仕事をしよう！企業のブランディングなんかには惑わされなぞ！」

僕は、その日から毎晩、仕事が終わった後、マーケティング関係の仕事を探し始めた。

WEBマーケティング会社、マーケティングプランナー、マーケティングコンサルタント、とにかく、自分がマーケティングを企画し、実践できそうなものを調べまくった。

すると、いくつかの自分がやりたいことができそうな会社を見つけた。

しかし、ほとんどの会社が東京だった。

転職活動をしたことがある人なら分かると思うが、絞った業種の仕事を大量に面接受けようと思ったら、大体が東京でしか見つからない。

また、僕に決断が迫られた。

東京に行って、本当に転職が成功するのか？もし駄目だったら、負け犬として鹿児島に帰らないといけないぞ？

そんな自問自答が繰り返された。

しかし、悩んでいても仕方がない。

やりたいことがマーケティングの仕事なワケだし、経験もないような仕事に転職を成功させたいのなら、大量に求人がある場所に行くしかないのだ！

人生はいつだって決断の連続！

失敗したっていいじゃないか、そうやって、俺はあの建設現場を乗り切ってきたんだらう？

僕は、東京に行くことを決心し、やっぱり元いた建設会社を辞めることを決意した。

貯金は100万円ほどしかなく、住む場所と引っ越しお金を考えると、三ヶ月ほどしか活動できないことが分かった。

「何としてでも、三ヶ月以内に・・・」

その気持ちを強く固め、所長に直談判しに行った。

所長は、意外にも簡単にYESをくれた。

とにかく、頑張れ！

それだけ言って、お別れ会にはまともや、A4のお肉を食べさせてくれた。

施工代理人も、僕には書類だけを任せて、後は自由に転職活動の準備をしろ！と言ってくれた。

毎日17時くらいには仕事が終わらせて、その後は面接練習や、転職に必要な考え方などを学んでいった。

大体、面接の確約が20社ほどとれた時だっただろうか？

会社の引継ぎ資料も完成し、引越しの準備も終わり、東京での活動拠点も決まった。

後は、退職手続きで支店に行って、退職するばかりとなった。

支店に旅立つ前の夜。

現場のメンバー全員が、「お前ならやれるよ」と言ってくれ、最後の飲み会を開いてくれた。

そして所長が、最後にこんな言葉をかけてくれた。

「情熱、人生は色々あるけど、自分のやりたいことをやりきって、後悔のないような人生を送れ。大抵の人間が、失敗を恐れて、何の面白みもないようなつまらない人生ばかりを歩もうとする。それじゃあ、この世に生まれてきた意味はないぞ。沢山本を読んで、沢山様々な経験を積むんだ。そしたら、きっとお前が望んだ人生に最後は行き着くから！」

僕は、その所長のありがたい言葉の意味をしっかりと噛み締めながら、最後の建設現場を後にした。

まったく上手くいかない転職活動

さて、九州支店での挨拶をすました後、僕は東京の港区に拠点を移した。

東京へは、研修の時に行っていたが、暮らしたことはないので、正直少し心配だった。

あれだけ超高層ビルが立ち並び、人が多い大都市である。

騙されて、薬漬けにされたりしないか？とか、意味の分からん妄想をしていた。

港区というと、住むにはかなり値段がかかるが、調べに調べまくって、四畳半ほどのシェアハウスが三万円で見つかったので、そこに住むことにした。

転職活動では、あっちこちに面接を受けに行かなければならない。

どうせ、電車料金が結構かさばると思っていたから、それなりに東京の中心に近い場所の方が、交通費も時間も節約できると考えていたのだ。

しかし、そのシェアハウスがまた、汚かった！

なんと、東京にも関わらず、ボットン便所だし、台所も風呂も狭い。

部屋はとなりの人の声がモロ聞こえて、ネットが繋がりにくく、結局近くのスタバなどに通って余計なお金が出費されてしまった。

当初予定していた、三ヶ月の転職活動費はかなり余裕を持って見積もっていたのだが、外食費などもかさんでしまい、本当にギリギリだったのを覚えている。

そして、何よりも困ったのが転職活動だ。

思った以上に全く決まらない！

そもそもマーケティング職というものを単体で募集している所が少ない！

これは引っ越す前から分かっていたことだが、転職エージェントから色々紹介されるだろうと思っていたので、あてがかなり外れてしまった。

とにかく、やりたい仕事に就けなければ、何の意味もないのだ。

また建設業の時の思いを繰り返してしまう。

マーケティングに近そうな仕事を片っ端から面接して回った。

最初は練習も兼ねていたもので、興味の無いようなものもいくつか受けた。

でも、これら全て、が駄目だった。

それなりに前の会社で実績を積んでいたつもりだったし、転職エージェントにも「この経歴なら大体の会社へ転職できますよ！」と言って貰えていたので、結構簡単に4,5社は転職先は決まるだろう！と思っていたが全然考えが甘かった！

4,5社どころか、1社も受からない！

実は僕には大きな欠点があった。

マイナス思考の理由を話してしまっていたのだ。

当然、僕自体そんな気持ちはサラサラない。

ただ、前職では200時間以上も残業していたし、超絶苦しい場所を耐え抜いてきたから、それがアピールになるかとお話していたら、それが「会社を逃げ出した！」という印象を与えていたようである。

でも、自分ではそれに気がつけなかった。

あっという間に2ヶ月ほどの月日が流れた。

僕にかなりの焦りが出だした。

まだ、どの会社にも受からないのだ。

もう焦りに焦りまくったし、夜も眠れないほど不安になった。

たかが就職先さえ見つけられないようでは、「お前なら出来るよ！」と、足りない現場メンバーの中、会社を辞める僕を快く送り出してくれた宮崎の現場メンバーに申し訳が立たない！

何より、最初の現場の奴らに「やっぱりあいつは駄目な奴だったな！」と言われるのは我慢がならない。

何がなんでも、いい会社に就職を決めたかった。

でも、どうしたらいいか分からない・・・

ここでもやはり、友人のTが救ってくれた。

Tには、僕が東京で転職活動を始めたことを話していたから、少し相談に乗ってもらったのだ。

「おお、情熱？久しぶり。転職活動はどうよ？」

「いや、全くといいほど決まらない！何でだろう？」

「ウソ？お前の経歴だったら、それなりに大丈夫そうだけどな・・・年齢も若いし！」

「悪いけど、ちょっとだけ、面接の練習してもらえないかな？どこが悪いか、指摘してほしいんだけど・・・」

「分かった！いくつか質問するから答えてみ！」

Tがいくつか僕に質問を投げかけた。

僕がそれに答えていく。

すると、すぐにTがこのような指摘をしてきた。

「分かった。確かにこれじゃあ受からんわ！」

「そもそも、お前、志望動機が理念とか会社の雰囲気に惹かれてとか、曖昧すぎるわ！というより、誰でも言えそうなことを言いすぎ！」

「本当にその会社に入りたいなら、もっと具体的な仕事内容を理解して、過去の自分の実務経験と結び付けなきゃ！」

「しかも、思いつきで言っているフシが多いね。ちゃんと、先に面接用のテンプレート決めてる？大体どんな質問が来るかは分かっているんだから、あらかじめ、面接官が好みそうな答えを用意しておけよ。」

さすが、Tである。

めちゃくちゃ的確な指摘を次々と僕にしてくる。

なるほど！

僕は確かに、考えがまとまりきれていなかったし、相手の企業のこととも考慮していなかった。

面接の本などで、ポイントは抑えていたはずなのに、いざやってみると、全然ポイントを考慮した答えを考えていなかったのだ。

他にも、いくら前の仕事がきつかったからと言って、そんなことを自慢げに話されても、どうしようもないとか、相手へのメリットを考えろ！とか、色々な悪い部分を指摘してもらった。

僕は、早速自分で面接で聞かれるパターンを紙に書き出して、企業が好むテンプレートのようなものを作った。

それを何度かTにチェックしてもらい、面接に望むようになると、ウソの様に面接に受かるようになった。

僕は、最終的に三つの企業に的を絞った。

一つは、今かなり有名企業となったベンチャー企業のマーケティング職。

一つは、中小企業だが、東大、京大、早慶などの有名大学ばかりを集めた今後の期待が持てるマーケティング会社。

一つは、誰もが知っている大企業の経営コンサルタントだった。

どれもハードルが高く、本来であれば、僕の頭じゃ、到底受からないような会社ばかりだったが、とにかく誰にも誇れるような会社に転職を決めたかった。

僕が、一番行きたかったのは最初に紹介したベンチャー企業のマーケティング職だった。

募集枠はたった一名で、経験者優遇と書いてあったので、どうみても僕に分が悪そうな感じだった。

ただ、そこが一番やりたい仕事が出来そうなイメージを感じさせていたので、思い切って自分でその会社が扱っている商品の販売コンセプトと販売戦略をパワーポイントにまとめてみた。

そして、書類審査の経歴書、履歴書を送る際に、「もし面接を受けさせてくれるのであれば、自分で作った御社の商品をどのように売るか？の販売戦略をまとめたプレゼンをさせていただきます。」と一言添えたのである。

これが功を奏したのか、向こうからメールが来て、是非、そのプレゼンを見てみたい！という旨のメールを頂いた。

何事もやる気を見せるには、行動を示すのが一番である。

とにかく、自分を売り出すためのきっかけを掴んだのだった。

ただ、問題があった。

後に紹介した、高学歴だらけの会社と有名企業の最終面接が一番行きたかったベンチャー企業より早かったのだ。

転職は、新卒の就職活動と違って採用をもらってからの返事を早くしなければならない。

一番行きたかったベンチャー企業は、残り二つの最終面接よりもずっと面接が後だったのである。

とにかく、先に高学歴企業の最終面接から先に受けた。

副社長との面接は上々！

結構、気に入られていたから受かる自信はあった。

だが、最後の社長との面接で、あっけなく落とされた。

何がいけなかったのか？正直言って分からなかったが、転職エージェントに聞いた話しでは、論理的思考能力が足りなかったように感じたらしい。

まあ、地頭が良くないのだから、仕方が無い。

元々の能力は、今更どうしようもないのだ。

気持ちを切り替えて次の会社に面接に向かった。

誰もが知っている有名企業とは、ほんの3,4年前にその経営手腕が買われ、一躍ニュースの一面を飾ったような経営コンサルタント部門だった。

はっきりいって、先ほど話した高学歴企業とは、一線を画すほどの大企業だ。

給料も100万円近く上がるし、経営に携わるような責任ある仕事なので、絶対に受かるはずが無いと最初は思っていた。

だが、予想に反して、その大企業はどんどん審査を通過していった。

論文審査まで入れると四次試験まであり、100人近く応募していたようだったが、最終的に、僕と、もう一人の男性だけが残っていた。

(おいおい、ここに受かるのか・・・?)

どうやら、この会社は能力云々というより、その人の性格を重視しているらしい。

論理的思考能力はゼロに等しい僕だったが、なぜか合格してしまった。

僕自体、この会社に受かることは予想だにしていなかったから、採用の通知を転職エージェントに電話してもらった時は、口があんぐり開いてしまっていた。

一番行きたいベンチャー企業を受けて、落ちたらこっちの大企業を……

本来なら、こういった選択をしたくなるものだが、さっきも言ったとおり、転職は結構、早く「行きます」の言葉を言わなければ、アウトになってしまう。

しかも、転職活動するお金も底を付いていた。

東京に引越ししてきて四ヶ月を超えていたから、契約していたシェアハウスも解約して、漫画喫茶住民にすらなっていたのだ。

日雇いの仕事もチョロチョロやりながら、無理やり活動をしていた。

(ベンチャー企業は可能性はあるが、まだ受かってもない……これで、もし落ちたりなんかしたら……)

結局僕は、安易な道を選んだ。

好きな仕事をやらなければ意味がない！

あれだけそう思っていたのにも関わらず、企業のブランド力と、魅力的な給料に目がくらんだ。

経営コンサルタントの道を選択したのである。

釈然としない気持ちは抱えてはいたが、早速心配している両親に電話をかけた！

「あっ、もしもし？母ちゃん？今日転職先決まったよ！あの〇〇って会社！そう、あの〇〇！その経営コンサルタントで、給料も100万円以上アップしたよ。」

もう、母ちゃんは弾むような声を出して喜んでいた。

ただでさえ、兄貴がパチプロで働かず、僕すらも会社を辞めてしまっていたのだ。

その嬉しさは思いの外大きかっただろう。

電話からも、ホッとした安堵の顔が想像できた。

僕も、親の心配を取り除いてあげられて、ホッとした。

友人のTにも電話をかけた。

仕事から帰った夜遅くに、僕の面接練習に付き合ってくれたのだ。

一番早くにこの報告をしたい人間の一人だった。

「さすが、情熱じゃん！凄いよ！」

電話で報告したら、すぐにこの言葉を掛けてくれた。

僕が今まで出会った人間の中で一番認めている相手からの、この一言。

嬉しくないわけがない。

釈然としない気持ちは、一気に消えうせ、新しい職場への期待だけが膨らんできた。

親にお金を借り、港区に新しく家賃が10万円ほどもする家を借りた。

会社からも近かったし、なんとなく友人にも紹介したくて、見栄を張ったのだった。

家具も全て買い揃えたし、自分で料理を始めたり、スポーツジムにも通いだし、入社までの数ヶ月間を、僕は優雅に過ごした。

なぜか憂鬱な新環境、そして地獄へ再び

2014年11月、僕はついに新しい人生に向かって再出発した。

新品のスーツを買い、新しい気持ちで50階建てくらいの本社ビルに乗り込んだ。

面接の時に既に何度か訪れてはいたが、やはり中は凄い。

お洒落な服を着た女性や、パリッとしたスーツを着たカッコいい男性が、キビキビと歩き回っている。

仕事場は物凄く広いし、パーッと並べられた長机に、余計な本や、小物は一切ない。

誰もが好きな場所に陣取って、仕事をしていいことになっていたのだ。

一人、黙々とキーボードを叩いている人や、ホワイトボードやプロジェクターを使ってプレゼンをしている人達を見ていると、とてもカッコよく思えた。

泥まみれで、男臭い建設業の職場とは大違いである。

まさに、ドラマなどで見るようなカッコイイ大人の世界だった。

その会社の形態は、コンサルティング部門と、システム部門、経理部門とで大きく三つに分かれていた。

コンサルティング部門は僕が在籍していた部門で、文字通り、コンサルを依頼してきた会社に直接話を聞き、経営を改善する部門である。

通常、経営コンサルタントというのは、パターンが決まっていはいない。

その会社に聞き込みを行ったり、現状の資料を見せてもらった後で、問題を発見し、それを改善するための施策を考え出して、提案するのだ。

同じ会社の人でも、担当が替われば独自の提案が行われるので、人によって改善策は変わるの
である。

しかし、その会社では独自に開発された経営システムがあらかじめ決まっていた。
創業者が考え出した、シンプルかつ、本質をついた型に、依頼してきた会社の経営スタイルを
変更するのだ。

だから、僕と一緒に受かった新しい中途社員は、最初にその経営システムの型を研修で学ぶこ
とから始まった。

僕は、経営自体ははっきり言ってそんなに興味はなかったが、新しいことを学ぶのはとても新鮮
で面白みがあった。

なんとなく、経営というと、難しいイメージを持っている人も多いと思うが、実質、単純明快で
、『売り上げ最大、経費最小』、これが経営の仕事であり、いかにこの目標を達成するために売
り上げを上げて、経費を落とすか？を考えていくのだ。

これを管理するためのシステム作り、人事配置決め、考え方などを学んでいった。

このシステムの最も優れた点は、毎回目標を明確に決め、それにそって目標到達率を確認してい
くことだと僕は思った。

多くの会社は、ただなんとなく目標を立て、なんとなく仕事をこなしていくことが多い。

いわゆるどんぶり勘定の経営なのだ。

だが、しっかりと売り上げ目標を立て、それに到達するように受注先を確定させていけばどうな
るか？当然、毎年売り上げは上がっていくのだ。

これは、経費もしかり！

どれだけ経費を抑えるか？を目標立てておけば、それに合わせてあらかじめ決めた経費に抑えら
れるように、日頃の仕事でかかる経費を抑制できる。

こうして、最初から完璧に決められた目標値というものを達成していくのだ。

更に、この会社の優れた経営手法は、システム部分だけでないということ！

人は、理論を学んだだけでは実践は出来ない。

それは、体が覚えていないということもあるが、マインドが弱いとそれについていけないのだ。

だから、この会社ではマインドに関してもしっかりと勉強をさせる。

物事をどのように考え、どのように行動していくのかが正しいのか？

これを教えてくれるのだ。

マインドまで目を向けた経営手法を教えるコンサルタントも中々ないのだろう。

この経営システムが人気のワケがよく分かる。

僕は、早く、教えてもらったシステムを基に実践したくてたまらなくなった。

学ぶことは好きだけど、それよりも早く行動に移したくなる性質なのだ。

しかし、いきなりメインで担当させてもらえることなどあるわけがない。

最初は、メインで配属された上司の後についての会話の記録が仕事となった。

一緒に入社したKさんは、早慶出身で、両親は弁護士、前職は超大手の外資系銀行の営業マンとエリート人生を歩んできた人だった。

何でも、銀行の派閥争いや人を蹴落としてまで営業実績を上げる銀行マンの生き方に嫌気をさしたらしい。

この会社の経営理念に心底惚れたらしかった。

一緒に、プレゼン用の資料をまとめたこともあったが、やはり優秀だった。

非常に見やすいように目次を作り、話の要点を頭に持ってきて、図などを入れた視覚的にも優しい資料を一瞬で作り上げていった。

僕より三個上の先輩だったが、とても丁寧なしゃべり方で、僕にも腰が低かった。

お互い、前職の話や、入社したばかりで感じた会社に対する意見の交換がお昼休みの楽しみだった。

「情熱さん、なんか思った以上にあの人が冷たくないですか？まだ入ったばかりの僕達に対して、あの言い方はないですよ？」

「いや、僕もそれは思いました。というか、普通はこう考えますよね？あの人が間違っている気がしますけどね～」

中途採用は、それなりに社会人を経験しているものなので、僕らがある程度仕事ができる体で話を進めてくる。

まあ、ありがたいことでもあるのだが、こっちとしても完全に畑違いの仕事から転職してきているのだから、ちょっとは考慮してほしいと感じる部分があった。

僕なんて、土木業からの出身だったから、サラリーマンとしての服装なんてほとんど気にもしていなかった。

そしたら、靴を買い換えろとか、時計が駄目だとか、財布が駄目だとかで怒られて、全部買い換えさせられた。

ただ、そういったもの全部を含めてお互い意見が言えるKさんの存在はありがたかった。

Kさんも結構、年下の先に入社した社員から色々言われてたみたいだから、気持ちは同じだったと思う。

他にも年齢が近いメンバーは沢山いた。

僕が転職したのは26歳くらいだったのだが、それくらいの年齢層が同じ部署に4~5人。

彼らも全員いい奴らだった。

凄く頭が切れたし、仕事が出来た。

雑用一つとっても、全然動きが良い。

Kさんと、僕、あと若手二人で飲み会にも行ったが、みんな発言がカッコよかった。

「僕、本当はマーケティングがしたいんですよね。経営よりも、マーケティングの方が楽しそうだし」

「えっ？僕もですよ！でもウチじゃ、そんな仕事できませんよね？」

「だから僕、あと三年くらい、ここを経験したら独立する気ではいるんですよ・・・自分でマーケティングコンサルタントのようなものを目指したいと思ってて。経営を知らずして独立も難しいと思ってこの会社に入ったんですがね・・・」

この会話は、この会社に入って三年目くらいの僕と同じ年のLさんの発言だった。

当時の僕はいつかは独立したいと思ってはいたものの、取りあえず上級職的な仕事が出来ればいいや。といった考えだったので、現実的にその目標に向かって努力しているLさんがむちゃくちゃカッコよく思えた。

「実は僕も、いつかは経営を。と考えてはいます・・・」

もう一人のおっとりしたOさんが口を挟ましてきた。

彼もまた、非常に優れた人材で、中央大学出身、元税理士と経営に非常に関係性が高い仕事をしていて中途採用の人間だった。

一応、僕らより三ヶ月前に入ったばかりのペーペーだったが、かなりしっかりと数字を把握して、たった三ヶ月の割りに、基本的な仕事は涼しい顔をしてこなしていた。

僕は、はっきりと彼らより劣っているのは分かっていた。

聞いたことをすぐに覚えられる脳みそは持っていないし、自分で何十時間も先に資料などを叩き込んでから戦略を立てる、努力タイプの人間だったので、パッとその場で答えを出せない。

会議などで、回答を求められると、結構口ごもってしまったりもした。

特に、議事録というものを作成するのが苦手で、聞きながら、文章を書き込む！という二つ同時に作業をすることが中々出来なかった。

だから、彼らに置いていかれるのが少し怖かった。

でも、そんな高い目標を持ち、いつも新しい刺激をもらえる彼らと知り合えて本当に良かったと思う。

求めていた高いレベルの同期達とは知り合えることが出来た。

上司も理不尽なことは一切言わなかった。

僕が腑に落ちることばかりを注意してくるし、とても的確な指示ばかりだった。

特に、相談役にあたるFさんという方がメンタルの面で非常にすばらしい人だった。

40年以上この会社で働いており、仕事とはどうあるべきなのか？を骨の髄まで理解されているような人で、

「情熱、まず仕事とは、こうありたい、こうあるべきだと願うことが大切だ。身が焦がれるほどの熱意を持って仕事に望む必要がある。なぜなら、その想いが強ければ強いほど、自分が為そうとした仕事をやり遂げられる可能性は高まるからだ。これがないと何事も上手くはいかないんだよ。とても単純なことだが、とても大事なことなので、忘れずに覚えておきなさい。」

と、僕に教えてくれた。

とてもシンプルだが、建設業で中々仕事が思うように進まなかった僕にとっては、身にしみていることが理解できた。

仕事がしっかりと出来て、後輩たちの面倒見も良い、これが本当の会社のあるべき姿なのだと思うた。

僕は、やっと自分が理想としていた会社生活を始められたのだった。

しかし・・・

二ヶ月くらいが過ぎたころだったろうか・・・

なぜか、僕の心は輝きを失っていった。

楽しくないのだ。

いや、それどころか嫌気すら差してきた。

なぜだろうか？

あんなに、憧れていた上司や同期にも恵まれ、仕事環境も申し分ない・・・

仕事自体も建設業界の時に比べて、全く辛いし、忙しくもない。

でも、なぜか面白くない。

やる気が出ない・・・

本当に不思議だった。

自分で自分が信じられなかった。

なぜ？自分は今の暮らしが楽しくないのだろうか？

なぜ？自分は今の仕事が楽しくないのだろうか？

なぜ？自分は今充実していないのだろうか？

答えが出ない・・・

先が見えない・・・

僕が求めているものは何なのだろうか？

当然、断捨離や、シンプルリストも試してはいた。

だが、それでも心の迷いは晴れることはなかった。

何かが自分の中に足りていない・・・

無い物である何か？を求める自分がそこにはいた。

その内、夜になってネットサーフィンをすることが多くなった。

多分、自分でも分からない内に何か足りないものを探していたのだと思う。

様々なニュース情報や面白情報を漁りまくっていた。

すると、ふとした拍子にとあるネットビジネスで成功した青年の話が目飛び込んできた・・・。

うつ病で寝たきりだったのに、インターネットでビジネスを始めて、パソコン一台で海外を飛び回っている？

「これだ！」

瞬時に僕は、自分が探していた新しい生き方が見つかった気がしていた。

そのインターネットビジネスの名前は『アフィリエイト』。

自分でインターネット上にサイトを作り上げ、広告を貼り付けて商品を守るビジネスモデルだった。

僕はマーケティングの仕事がしたかった。

アフィリエイトはまさに、マーケティングの仕事である。

しかも、会社に入らなくても自分一人でビジネスが始められる。

これ以上ないくらい、魅力的な仕事が見つかって、僕は心がこれ以上ないほど高鳴るのを感じた。

「そうだ！今の仕事をやりながら、アフィリエイトも同時に進めていこう！軌道に乗ってから、会社を辞めればいいんだ！」

僕は、友人のTにすぐに連絡をとった。

そして、この仕事の魅力を余すところなく伝えきった。

するとTからこんな返事がきた。

「えっ？お前、やっと今の会社に入ったのに、もう他の仕事のこと考えてるの？大丈夫・・・？」

最もな返事が来た。

確かにその通りだ。

今の会社に入って三ヶ月もまだ経っていない。

にも関わらず、この感じ・・・

俺は本当に大丈夫なんだろうか？

逃げようとしているだけなんじゃないだろうか？

そんな疑問が頭を渦巻いていた。

それから一、二週間経ったころだろうか？

僕は酷い食あたりと、高熱を出した。

39度近く熱が出ていたので、朝も起きられず、動けない……。

僕は仕方なく、会社に電話を掛けた。

プルプルプル……

プルプルプル……

ガチャ！

「はい、株式会社〇〇です。」

「あっ、すみません。経営コンサルティング課の情熱です。酷い食あたりしたみたいで、かなり高熱が出てしまいました。まったく動けない状況で、本日はお休みさせて頂きたいのですが……」

会社に連絡を入れ、そのまま僕は一週間ほど寝込んでしまった……。

と、その一週間の間に一本の電話が入った。

僕の所属している課の課長からだった・・・。

「情熱、具合はどう？悪いけど、今から会社のすぐ近くに来てくれないか？」

「いや・・・今、高熱と吐き気、下痢なんかで動けないんですけど・・・」

「でも、これは、お前の人生にかかわるような問題だぞ！無理してでも出て来い！」

短いやりとりだったが、そのまま電話が切れた。

いきなり電話を掛けてきて、どうして病気にかかっている僕に、会社に出て来い！なんて言うんだろう・・・

僕はふざけんな！と思った。

こっちは、かなり苦しいんだ。

あほか！という気持ちで、そのままシカトして寝込んだ。

しかし、これが最悪の結末を生むきっかけだったのである・・・

僕が体がよくなって入社すると、いきなり上司に呼び出された。

「情熱！ 常務が別室に待っているから、お前はすぐにその部屋に行け！」

そういわれて、僕は会議室のとある部屋へ向かった。

コンコン・・・

ドアをノックして、部屋に入ると、常務が厳しい顔をして僕を待っていた。

「そこにかけて・・・」

おもむろに椅子を勧められ、常務はふう〜っと長い息を吐いた。

「情熱、具合はもういいのか？」

「ええ、大変ご迷惑おかけしました。今日から頑張ります。」

「それは良かった。ただな！ お前、病気の時、課長のYから呼び出しがかかったらろう？ なぜ出てこなかった？」

「えっ？ いや、僕は熱が39度もありましたし、下痢と吐き気で動けるような状態じゃなかったんで・・・」

「にしても、会社に出てくるくらいは出来ただろう・・・お前、何で呼び出されたのか心辺りがないのか？」

「・・・・いえ・・・・」

「お前さあ・・・・、病気で寝込む前、エレベーターの場所で、会長秘書のSにぶつかったらろう？ちゃんと謝ったのか？」

????

マジで「えっ」と思った。

まさかあんなことで・・・・？

実は、僕が会社を休む前、エレベーターの前で会長の秘書のSという女にぶつかっていた。

Sが会社の中で食べようとカップスープにお湯を注いで、それを持ち帰ろうとしていた時だったらしく、僕がぶつかったせいで、手にお湯がかかったのだった。

無論、そのお湯が手にかかったとき、僕はすぐに謝罪をした。

「すみません！大丈夫ですか？」

「うわぁ～熱い！最悪！」

見ると、手に少量のお湯が！

僕はもう一度謝った！

「すみません！大丈夫でしたか？」

「マジ最悪！ふざけんな！」

「あの～本当すみませんでした。」

「はぁ～マジイラつく！あんたどこの誰？」

「いや、〇〇会社の経営コンサルティング課、情熱といいますけど・・・」

「はぁ？あんた、一緒の会社なワケ？分かった！覚えとく！経営コンサルティング課の情熱ね！」

異常なくらいの高飛車な女だと思った。

普通、お湯がちょっと掛かったくらいでここまで切れる奴がいるだろうか？

その時、同期で一緒に入社したKさんが近くにいたのだが、一部始終を目撃していたので、

「あんな奴とは関わりたくないですね。ちゃんと謝っているのに、意味が分からない！早く飯でも食いにいきましょう！」

とってくれた。

その時は、何でもないことだと思っていた。

僕は気にもとめずに、Kさんと近くの店の親子丼を食べに行った。

が、しかし、会社に戻り、夕方近くになると、事務のAさんという人が僕の近くに寄ってきていきなりこういった。

「情熱さん、お昼にもしかして人とぶつかりました？」

「あっ！はい！一応謝ってはいたんですが、なんかヒステリックな女性で、全部シカトされました・・・はは・・・」

僕は何も悪いことをしているつもりはなかったのに、軽い気持ちでその事務の子に愛想笑いを浮かべていた。

「あのね、情熱さんがぶつかった相手の方はこの会社の会長秘書で、昼間のこと、物凄く怒っていらっしゃるの・・・謝りに来いっていつているんだけど・・・」

「はあ・・・」

Kさんとお互い顔を見合わせ、「まあ、大丈夫でしょ！」と言いながら、会長秘書の待つ秘書室へと案内された。

そして、Sが僕の顔を見ると同時に、

「あっ、来た来た・・・！情熱、あんたのせいで火傷したんだけど！」

そうやってSは自分の手を見せてきた。

ちょっと赤くなっているくらいで、特段変化はないように見えた。

というか、いきなり情熱だあ？

いくら会長の秘書だろうが、いきなり人を呼び捨てだとは何だこの女は。

生意気すぎるだろう・・・僕が、若干の怒りを覚え始めていると、

「あんたさあ、人にお湯をかけといて、一言も謝れないわけ？意味分らないんだけど・・・どう責任取るつもり？」

いやいや、待て待て！

確かに、ぶつかったのは悪い！

だけど、そっちもコッチを見ていなかったらどう？

しかも、お湯がかかったからと言って、そこまで酷い火傷じゃないはずだ。

見たところ水ぶくれすらなっていないように見えたぞ。

てか、ちゃんと俺は謝っただろう？

お前が、勝手に切れて、人の話を聞いていなかったんじゃないか！

それをお前は何様だ！

初対面の人間に対して呼び捨てまで普通するか？

僕は、当然のごとく頭に来た！

しかし、会社員の悲しい性か、すぐにこういう計算を始める。

いや、待て！

コイツに今謝らないと面倒なことになる。

なんてたって、相手は会長秘書だ。

僕なんかが齒向かったとこで、どうせ相手の方に皆が肩入れするに決まっている……

僕はしょうがなく、ムカつく相手に頭を下げた。

「すみません。以後、ないように気を付けます。」

心の中では納得していないのだ。

当然、頭も軽く下げて、演技で謝った。

明らかに相手は納得していない。

「次、こんなことがあったら、許さないからね。」

一応、形式的に謝ったこともあり、相手はイラつきを見せながらも渋々引き下がっていった。

最後に僕の顔を睨めつけつつ……

さて、こんなことが病気の前にあったのだが、まさか、蒸し返されるとは思ってもいなかった。

なんと、あの女は会長にまでこのことを伝えて、それが常務にまで行き渡っていたのだ。

「まさか、会長秘書との小競り合いのお話ですか？」

僕は、恐る恐る常務に聞いてみた。

「そうだ！お前、聞くところによると、ぶつかった際にちゃんと謝らなかったそうじゃないか！」

「いえっ！そんなことはありません！ちゃんと謝りましたし、僕が謝罪しているところを、Kさんが目撃しています。」

「にしてもだ！謝りに後で呼び出したとき、お前はマスクもとらずに謝ったそうじゃないか。誠意が全然見られなかったと言っているぞ！」

「いや、それはっ！」

コイツらマジか？と思った。

たかが、お湯だぞ。

それがちょっと手についたくらいだ。

それを謝らせるためにわざわざ秘書室に呼び出し、更に病人を会社に呼び出すようなことなのか？

信じられん！

更に、常務は追い討ちをかけるように僕に言ってきた。

「お前さあ、課長も言ってたぞ。情熱は服装もしっかりとしたものを着ていないし、まだ聞き取り(訪問先の社長との会話の議事録作成)も出来ていない。ちょっと能力的にも、前の仕事の癖からも今の会社じゃ、難しいんじゃないか？」

要するに遠まわしで、辞めろ！と言っている。

「いや、確かに、建設業の仕事をしていた部分もあって、こういったピシッとしたビジネスは分かりかねることが多数あります。能力が他の人に比べて劣っていることも認めます。しかし、今回の件とは関係ないのではないのでしょうか？」

僕は思っていることを素直にこういった。

「お前、悪いと思っているのか？」

「……」

「秘書のSさんにお湯をかけたことをどう思っている？」

僕は、建設業の時、こういった上司の圧力などに流されて、酷い目をみた。

そして、例え、こういった場面に陥ったとしても、自分が決めた素直な心に従うと決めていた。

「いいえ！僕は悪くはありません！」

キッパリと言い放った。

それで、どういった結果になるかは分かった上で……

「そうか！多分、お前はこの会社には向かない。アベノミクスで建設業もこれから盛り返すだろうから、そっちに戻ったほうがいい。」

面接の時、建設業の実情を話して入社させてくれたのに、今度はコレか！と思った。

そう、この時、僕の解雇が決まったのだった・・・

正直に言って、この時僕は自分が少し誇らし気だった。

ちゃんと自分のプライドを守りきったし、言いたいことを言い切ったと思っていた。

しかし、会社の荷物をその日でまとめ、家に帰り着いてから恐怖は突然襲ってきた。

この先どうすれば・・・

急に頭の中が真っ白になった。

喜んでくれた両親、転職を手伝ってくれた友人の顔がチラついた。

あんなに苦労したのに、

折角、大企業に入ったのに、

友人にまで自慢しちゃっていたのに・・・

僕は人目を気にする人間なので、なんだか、会社を解雇されたことのショックより、他人に見せる自分が恥ずかしくてしょうがなかった。

「えっ？何だ？俺・・・これからどうすればいいんだ？みんなにどんな顔をして会えばいいんだ？」

もう、ワケが分からなかった。

自分は、何なのだろう？

何を変えたかったのだろうか？

何のために苦勞してこの会社に入ったのだろうか？

自分の全てが理解できなかった。

とにかく、頭が真っ白でひたすら気を紛らわそうと、お笑い番組を見たり、ネットサーフィンをして夜中寝ていた。

ネットでゲームを見つけては、それをずっとやり続けたりもしていた・・・。

何か他の物に逃げてもしょうがないのは自分でも分かっていた。

でも、どうしようもない・・・

何もする気が起きないのだ！

しかし、時間は待ってはくれない・・・

僕が、ダラダラと現実から目を離そうとしている内に、家賃の支払い要求が来た。

10万円の家賃である。

他の諸々の光熱費や雑費の支払いを済ましたらお金が全くというほどなくなった。

前述していたように、僕は親に借金までするほど、転職活動や引越しなどで蓄えが消えていたから、次の家賃の支払いは無理だと分かった。

手元に数万円のわずかなお金を残し、借りたばかりのマンションを引き払った。

何が、上級職！だ。

何が、大企業に入れた！だ。

何が、経営コンサルタント！だ。

何が、港区のマンションに住んだ！だ。

僕には、何一つ成し遂げられていないじゃないか！

両親に心配をかけ、金を借り、友人に協力までしてもらったのにあっさり解雇される。

ただ、マイナスの結果を残しただけじゃないか！

僕は以前の会社で何を学んだんだ？

ブランドに騙されずに、本当にやりたい仕事をやろうと、充実した仕事をやろう！と考えたんじゃないのか？

自分の全てが許せなかった！

情けなく思った！

でも、もう会社を解雇されてしまったのだ。

どうしようもない！

家を引き払う時、僕はトランクケース二個に、リュック一つ、あとはいくつかの手荷物！と、たったそれだけの荷物になって他を全て捨てたり、売ったりした。

何もかもを失った気がした。

今度は恋人や自信どころじゃなく、文字通り全て失ってしまった。

お金もない、家具もない、家すらもない……

一人、宛もないまま東京の街へと歩き出した……

本当にやりたいことを始め、実力の世界に足を踏み出す！

家を無くし、ホームレスになってしまった僕は、最初、ネット喫茶に泊まろうと考えていた。

でも、アルバイトすら決まっていけないのに、ネット喫茶なんか泊まって、飯を食べたりしていたら、あっという間に今あるお金すら無くなってしまふ……。

住み込みのバイトなんかも実は探したりしていたのだが、それすらも条件が合わずに中々決まっていなかった。

このままでは、本当の意味でどうしようもなくなってしまう……

最低でも生きていくためのお金を得るためのバイトが決まるまで、僕は野宿をすることにした。

とにかく今は、考える時間が欲しかった。

家を放り出されるまでに、一ヶ月くらいは時間があったのに、色々逃げたくて考えようとしなかったが、さすがに現実に引き戻されると、考えざるを得ない。

2月の真冬の厳しさを感じながら外で寝たら、否が応でも頭が働くだろう！

僕は、とことん自分を追い詰めるのも一つの作戦だと思っている。

なぜなら、建設業の時もそうだったが、本当にどうにもならなくなった時にこそ、人間は本当に脳みそがあせて最高な答えを出しやすいからだ。

とりあえず、死なないために毛布を買って、断熱用のブルーシートと、ダンボールを揃えた。

問題は場所だ！

いくら家を無くしたホームレスだと言っても、それなりに荷物がいっぱいだった。

どこでホームレスすればいいかも分からなかったなので、動きたくない一心から、そのまま引き払

った家の近くの広場のような場所で、簡素なダンボール住宅を作った。

ただ、ダンボールを繋ぎ合わせて、人間が一人通るだけの長方形の箱のようなものだった。

それにブルーシートを巻きつけて、なるべく風が通らないようにしてみた。

あとは自分の体にドンキで買った安物毛布を巻きつければ完成である。笑

生まれて初めてのダンボール野宿は、最悪だった。

超絶寒い！

もう、ダンボールやブルーシートなんか何の役割も果たしていない。

ビュービュー風が吹き込んできた。

「これは、死ぬかもしれないな・・・」

本気でそんな想いが脳裏をよぎった。

歯はガチガチなるし、寒さというより悪寒が走るような冷たさだった。

しかし、ここまで落ちたのにも関わらず、何となく、その瞬間を楽しんでいる僕もいた。

「ここから逆転できたら、カッコいいな・・・笑」

僕の中で最も辛かった出来事は建設業でいじめられていた時と、彼女がいなくなった時だった。

そして、一度、その地獄から乗り越えた経験があった。

だからなのか、僕は少し楽観的になっていた。

寒さで死にそうな気がする！

これから先の未来にも宛はない！

でも、こういう時こそ、焦らない！

そんな気持ちがあった・・・

あまりの寒さで全然寝付けず、一晩中この先の将来について考えていた。

とにかく、もう就職は出来ない！

僕という人間は、会社という人間では生きていけないのだ。

なぜ？あれだけいい会社に入れても楽しく感じなかったのか？

なぜ？人生に充実感を得られなかったのか？

色々考えてみたが、最終的に自分でビジネスをやるしか方法はない！

でも、本当にそれでやっていけるのだろうか？

仕事に嫌気がささないだろうか？

でも、この間見つけた「アフィリエイト」というビジネスは本当に楽しそうだ。

しかも莫大なお金を稼げる可能性を秘めている・・・

でも、そのアフィリエイトで稼ぐまでの間は どうしよう！

バイトをしなければな・・・

でも、家賃はどうする？

東京じゃあ、家賃が高い場所ばかりだ！

新しい場所を探そうにも、どこを探せばいいのだろう？

とにかくお金が足りない・・・

やっぱり、普通の会社に入って、それからアフィリエイトやった方がいいんじゃないか？

でも、そんな二足のわらじを履く様な生活、僕ごときが頑張れるか？

一本に絞って、集中して仕事をやらなければ、僕という人間は何も出来ないと建設業で学んだんじゃないかったか？

.....

もう、考えすぎて頭がおかしくなりそうだった。

本当にずっと、自問自答を繰り返していた。

空が少しずつ白みだし、気温がちょっとつづ上昇し出した頃、僕は脳みその使いすぎと、寒さで一晩中眠れなかった疲れから、ようやくウトウトし始め、死んだように眠りについた。

「ドンドン！」

それからいくらかの時間が流れただろうか・・・

いきなり、お手製ダンボールを何者かが叩く音がした！

「何だ何だ?!」

僕はとてもビックリして目を覚まし、狭いダンボールの中から這い出して、ダンボールを叩いた人物を眩しそうな顔で見上げた

すると、驚くことに、警察官がそこに立っていた。

「君！こんな所で寝てちゃ困るよ！苦情が来ているよ？」

いきなりの警察官の訪問に面を食らった！

どうやら、近所の住民が、閑静な住宅街に突如として住みだしたダンボール男を通報したようだった。

「君、免許証持ってる？見せて！」

警察官が、さも不思議そうな顔をして、僕に身分証の確認を試みてきた。

「え～、君、まだ26歳じゃない・・・こんなに若いのに・・・」

「・・・・・・・・」

「ちょっと前にいきなり解雇されたんです。すみません。」

消え入るような声で、僕は警察官に事情を話した。

すると、警察官が哀れむような感じで声を掛けた。

「そうか・・・まあ、事情が事情だし、仕方がないっちゃ、仕方がないよね・・・」

「でもね、ここでダンボールをこしらえて、眠ってもらっちゃ困るんだよ！住民から通報来ちゃうからね。悪いけど、そのダンボールを壊してもらえる？」

すると、突然僕がダンボールの家を作った広場から怒声が響いた！

「おいっ！こんな所で寝るなよ！迷惑なんだよ！上野へ行け！上野へ！」

どうやら、警察に通報したらしきオッサンだった。

生活補助でも受けに行けよ！とか、上野だったら、お前みたいなホームレスはいっぱいいるからそっち行け！とか吼えまくっていた。

僕だって、好き好んでこんな場所にいるわけない！

壮絶なくらい、悔しさと悲しさが襲ってきた。

「まっ、君もどうすればいいか分からなかったんだろう。実家には連絡したの？」

僕のあまりに哀れな様子を見て、警察官も不憫に思ったのだろう。

優しい口調で、助け舟を出そうとしてくれていた。

「いや、両親には迷惑かけたくないので・・・」

僕なりの最後の意地だった。

あんなに転職に反対していた両親を振り切って、勝手に東京へと行き、やっと転職が決まったと思ったら、お金を要求し、拳句の果てに解雇された僕だったのだ、実家になど帰れるワケがなかった。

「ここからは出て行きますので！迷惑掛けました・・・」

夜に考えていた、「ここから逆転してやる！」的な想いは一瞬でねじ伏せられ、また恥ずかしさと絶望感がこみ上げていた。

これから、どうする・・・？

上野に行くしかないか？

生活保護を受けるか・・・？

色んな考えが頭の中を渦巻いていたが、とにかくひたすら歩き回った。

電車にも乗ろうと考えていたが、上野に行く決心も沸かない・・・

確か、スカイツリーの辺りまで歩いたり、東京タワーに行ったりと、ひたすら遠くに見えた目印を目標に歩いていたと思う・・・

その日は、スカイツリーの近くの階段でうずくまるように寝た記憶がある。

めちゃくちゃ寒かったが、異常に疲れて、すぐ眠った気がする。

そして、翌日もまた、宛もなくさまよい歩いた。

色々考えながら、どうしても出せない答えを、必死に模索した。

最悪なことに雨も降ってきた。

傘一つ買うにも、金が勿体無い。

というか、傘を差す気にもなれない。

「ははは・・・ヤバイな俺・・・」

本格的に、どうしようもないような状況だった。

なんだか、惨めさを通り越して、笑えてきた。

でも、後悔だけはしていなかった。

あのまま建設業にいても、仕事はつまらない、人生がつまらないということだけは理解していたからだ。

まるで、働きアリのように残業をさせられまくり、小銭のような給料で大きな責任が課せられていく・・・。

何の未来も楽しみも生み出せない！ということだけは分かっていた。

ただ、あまりにも周りの人の期待や信頼を裏切りすぎた。

家族と友人、送り出してくれた建設業でお世話になった人の顔がチラついた。

それだけが、とても残念で恥ずかしかった。

「プルプルプル・・・」

いきなり携帯の着信が鳴り響いた。

あわててスマホの画面を見ると、東京に住む友人のHからだった。

実は、コイツは中学生の頃の同級生で、東京に住んでいた。

中学校生活では、一番仲の良かった友達の一人だ。

経営コンサルタントになる前も、引越しなどで、ちょこっとお世話になったりしていたのだが、僕の就職状況を心配して、連絡してくれたのだ。

ガチャ！

「はい、もしもし？」

「おう！情熱！今どうなった？」

「いや！それが、結局解雇されたから、家賃が払えなくなって、それで・・・」

「マジか？今どうしてんの・・・？」

「ホームレスになって道をずっと歩いてるわ・・・」

「・・・・・・・・」

限りなく情けない声で、返事を返すのがやっとだった。

自分からは、中々居候させてくれ！とは懇願し難かった。

しばしの沈黙が続いた後、Hが切り出した！

「・・・じゃあ、仕方ないからウチに来るか？しばらくだったら置いてあげるぞ！」

「えっ？本当にいいの？」

本当に心の底から感謝した。

仕事を無くして、家を無くして、どん底に落ちると、今まで如何に自分が恵まれていた状況にいたかがすぐに分かる。

手も足も出ない状況からの、彼の懐のデカさにはほとほと感心する。

一生、頭が上がらなくなってしまった。

「悪いけど、ここしか空いていないから、ここでいい？」

Hの家に着くと、物凄い安堵感に襲われた。

たった二日、三日のホームレス生活だったが、予想以上に精神、肉体ともに僕のエネルギーを奪っていたからだ。

Hの家には実は、別の友人が居候していたから僕の寝るスペースというものがほとんどなく、居間の座る場所に直接寝ることとなったが、本当にそのスペースを与えられただけで天国のように感じた。

一応、最終的にHには家賃を分割した一部を支払うことになったが、最初の一、二ヶ月はそれすらも払わなくて良い！と言ってくれた。

なんとか、僕の居場所が確保されたのである！

「さてと・・・どうしていくか・・・？」

友人のおかげで、居住区は確保できた。

インターネットも繋がっている。

新しく会社を選ぶか、それとも自分でビジネスをやっていくか？

もう崖っぷちまで追い込まれているのだから、僕はどっちか一方を選択するしかなかった。

一度転職活動をした苦しみを味わっている僕である。

もう、会社も解雇された経歴を考えれば、大企業に入れるという望みはないことは分かっていた。

ただ、だからと言って、建設業に戻るつもりはサラサラない・・・

というか、あれだけいい会社に入れたものの、結局そういった環境を手に入れても、嫌気が差し出していたのだから、自分には会社勤めは無理だと分かっていた。

多分、僕という人間はずっと同じ人間と過ごすのが嫌なのだ。

自分で何かを成し遂げないと、会社の歯車として働くことが嫌なのだ。

誰かに命令されて動きたくない！自分で自分のやりたいことをし、道を切り開いていきたいのだ。

転職は、転職そのものが目的となり、その後に働く仕事自体を求めたものではなかった。

今回の失敗で、嫌というほど分かった。

とすれば、やはり、自分でビジネスをやっていくしかない！

経営コンサルタントにいた際に見つけた、アフィリエイトというビジネス。

これこそが、僕の本当にやりたかった仕事であり、この危機的状況から人生を逆転させる最後のチャンスなのだと思う。

「よし！自分でアルバイトをやりながらアフィリエイトをやっていこう。」

「今までの失敗だらけの人生を逆転させてやるのだ！」

「どうせなら、目標は大きく、海外を旅したり、稼いだお金で新たにビジネスを作り出すくらいまでやってやろう。」

そう思った僕は、目標をアフィリエイトで生計を立てる！ではなく、

「アフィリエイトで世界を旅できるくらいの資金を稼いで、アマゾンの奥地でピラルクを釣り上げる！」

に設定した。

どうせ持つなら、大きな夢がいい！

小手先の目標は、上手く物事が進まなかったときに判断を鈍らせてしまう。

だからこそ、現在の僕では絶対に成し遂げられないような夢を目標に努力していくことを自分の成すべき生き方とした。

すると、不思議と心がスーッと晴れてきた。

あれ？なんか、見栄ばかり気にしていた自分ってカッコ悪かったな。

本当の意味で自分の人生に覚悟を持って生きようと思うと、自分で食い扶持を稼いでいく方が、カッコいいな！

そう思えてきた。

僕は、目指すものが見えると、頑張れる人間だ。

というか、人間っていうものは皆そうではないだろうか？

何か期待できる光が見えるから、今を頑張れるし、嫌なことでも、やらなければならないからこそ、やり遂げられるのだ。

それこそが、サラリーマン時代の僕に足りないものだったのだと、やっと理解した。

僕の今後の活動方針がやっと決まったのである。

とりあえず、手始めに失業保険の手続きと、アルバイト探しを始めた。

バイトは、最低7,8万円くらいあればいいし、なるべく脳みそを使わない仕事をしようと決めていた。

これは、建設業で学んだことでもあったのだが、物事は徹底的にひとつのことに絞ってやるのが一番だ。

あれもこれもと欲張って、何かを得ようとする、ほとんどの確率で失敗するからだ。

とにかく結果が出るまで、ひとつのことだけに集中する。

そのためにバイトは、脳みそを使わないでもできる簡単なものを探したのだ。

結局、アルバイトが決まるまでには結構時間がかかった。

意外と良いものが見つからず、失業保険とクレジットカードで、ある程度はまかなえたからだ。

その間にも、とにかく本業であるアフィリエイトの勉強を独学で始めることにした。

アフィリエイトとは、以前も述べたように、自分で作ったサイトに広告を貼り付けて商品売り

、その販売手数料をもらうビジネスモデルのことである。

もう、これが一番のメインである。

お金のほとんど無い、僕ですらすぐにでも始められるのだから、一刻も早く、結果を出すための方法を学んで実践していかなければならなかった。

今でこそ、アフィリエイトというものをソコソコ理解している僕ではあるが、その当時は本当に何も分からなかった。

ドメインって何？htmlって何？サーバーって何？

という感じで、サイトを作るどころか、言葉の意味すら全然知らなかったし、それこそ何が重要で何を理解すべきなのか？さっぱりだったのだ。

そこで、まずは、本当に基本的なアフィリエイト初心者のための基礎本を三、四冊古本屋で買い揃えてきた。

「ふむふむ・・・最初は、無料ブログというもので、自分の興味がある、あるいは過去の体験談などから記事が書けそうなジャンルを選定していけばいいんだな・・・」

はっきり言って、アフィリエイトというものはとてもシンプルで簡単である。

基本的内容を基礎本で読み漁ると、すぐにやらないといけない、考えなければいけない要素というものが見えてきた。

「おいおい、これはマジでいけそうだな！めっちゃ簡単じゃん！」

当初の僕はすぐにそう思った。

しかし、何でもそうだが、物事は実際にやってみようとする、そこに潜む難しさや、やるべき仕事の多さに気がつくことになる。

「え〜っと、まずはASPとやらの登録して、キーワードプランナー、アナリティクスに登録して・・・それと・・・」

先ほども話したように、概要はすぐに掴めた。

だが、『結果を出すための最善の手法!』というものが見えなかった。

こればかりは、経験を溜め込んでいくしかない。

僕は、とりあえずお金を掛けないように無料ブログでの初めてのサイトを作ることにした。

これまで書いてきた通り、僕は転職にかけてはそれなりに学んできた男である。

転職サイトを紹介するアフィリエイトサイトというものを作ったのだ。

しかし、これまた中々上手くいかなかった。

というより、何をどういう形で紹介していくか?

構成が思い浮かばなかったのだ。

でも、やるしかない。

やらなければ、何も始まらないのだ。

なので、僕は無理やりでも記事を書き進めていくことにした。

この無理やりにも、サイトを作っていく!というのはアフィリエイトを作る上ではとても大事だと思う。

というか、何でもそうだが、何かやらないと、経験値がたまらない。

見ただけ！の人と、実際にやった人！とでは、雲泥の差が生まれてくるのだ。

だから、最初に作ったサイトは信じられないくらい最低のものだったが、実践したことで、多くの気づきと、抑えるべきポイント！というものを僕に教えてくれた。

当然ながら、その行動を起こしつつも勉強は進めていった。

ありがたいことに、現在は物凄く稼いでいる人が無料で情報を開示してくれていたりもする。

そういうブログなども参考にしていきながら、生きた情報というものを自分の中に落とし込んだ。

まあ、しかし、いくら情報を得ても、経験を積んでも、アフィリエイトというものは、『時間がかかる』という最大の弱点が兼ね備えられていた。

つまり、色々学びながら実践していくのだが、結果がすぐに出てくれないので、不安になるのだ。

一ヶ月目、当然のごとく0円。

二ヶ月目、当然のごとく0円。

と、中々変化の出ない自分のサイトがどうしても信じられなくなってくる。

すると、

「ああ、やっぱりデザインが悪いんだな・・・無料ブログじゃ、やっぱり駄目なのかな？キーワードが購入期待度が無いものを選んじゃったのかな・・・」

とかの不安が出てきた。

そして、その不安から僕は、自分のサイトが無料ブログだから駄目なんだと思って、全部自分で

手書きでサイトを作ったりしたのだ。

こういうのって、本当に今思えば無駄な時間を過ごしていたのだが、肝心な部分が掴めずに、表層的变化を追ってしまうのが、素人の特徴である。

ご他分に漏れず、僕もどうでもいいようなことで、色々右往左往していた。

お金をかければ、すぐに解決しそうな問題もいくつもあったが、既に生活に余裕がないので、ちょっとした出費をするだけでも躊躇いが生じられるのである。

ちょっとでもアフィリエイトをかじったことがある人なら分かるだろう。

無料で始められるビジネスなのだから、なるべくお金をかけないで、やりたくなるのが、人間という生き物なのだ。

が、しかし、何とんでも稼がなくてはならなかった。

だから、僕は諦めずに前進することに決めた。

ほとんどお金が無い状態ではあったものの、クレジットカードを利用して、必要であるサイト作成ソフトを購入したり、スペックが落ちまくっていたパソコンを買い換えたり、かなり高い情報教材を購入してみたりと、できる限りやれることは全てやるようにした。

先ほども言ったように、お金はなるべく掛けたくない！という僕だったのだが、本気の想いで、アフィリエイトをやるのだから、これくらいの投資は借金してでも必要不可欠！と割り切ったのだ。

すると、そんな僕の本気度を神様が見てくれていたのか、三ヶ月目からちょいちょいとお金が発生し出した。

もちろん、小額も小額。

数百円くらいのものである。

それも、クリックされるだけで報酬が発生するような、実力で生み出したようなお金ではなかった。

普通はここで若干の喜びを感じるのであろうが、僕にはそんなもの一切感じられなかった。

なんせ海外を冒険できるくらいに稼ごうという人間である。

数百円の稼ぎくらいでは全然満足するワケなかった。

が、しかし、サイト自体から物が売れはしなかったが、人が訪れるようなサイトにはなってきたということだった。

だから、更に記事を更新しまくったり、新しいサイトをいくつか作りまくった。

実力だけが物をいう世界に飛び込んだのだ！誰のせいにもできない！

とにかく自分に大きな結果が出だすはずだ！と信じて・・・

アフィリエイトの世界に飛び込んだ僕だったが、両親は当然のこのように反対だった。

解雇されたことは既に話していたが、親の世代ではインターネットを使ってお金を稼ぐなど、信じられないことだったのだろう。

「とにかく家に帰ってきなさい！」の一点張りで、とても僕がやろうとすることに賛成の意を示そうとはしなかった。

いや！確かにそうだろう・・・。

勝手に転職して、お金を借りて、やっと一息ついたと思ったら、解雇された息子の話である。

とても、信用のおけるものだったとは口が裂けても言えない。

とにかく、家に帰らせて、今後のことについて、話し合いたいそうであった。

だが、僕はそんな両親の心配をよそに、頑としてアフィリエイトをやることを譲らなかった。

というか、絶対にこんな仕事認めてくれそうになかったし、既に20代の半ばを過ぎた男がやることに親が口出しをして欲しくなかったのだ。

僕は、知らず知らずの内に親離れできていなかった。

当然、建設業時代から実家とは離れた場所に暮らしていたし、東京に出てきていたのだから、表面的には自立していたと思う。

だが、最後の最後にお金を借りたことで、精神が自立できていないことを悟っていた。

転職が決まったとは言え、反対していた両親から最後にお金を借りて引っ越したことは、まだまだ、子供として甘えていたのだ。

そもそも、社会人になった男が、親と仕事について相談し合うなんて子供の証拠だ。

今から自分の進路を決めていかなければならないのに、どうして親の判断が必要となるのだろうか？自分の道なのだから、自分ひとりで決めて、責任もって行動していけばいい。

だから、両親には、絶対に家には帰らない！と念を押しておき、最終的には親の携帯番号を着信拒否するまでに至った。

多分、これを聞くと、多くの人はそういう風に両親を心配させることが、子供の証拠じゃない！と感じると思う。

だが、僕は経済的にも精神的にも、自分が満足する成功をおさめてこそ、本当の自立を証明し、親を安心させる配慮だと考えている。

どうしたって、調子が悪くなると、親には自分の苦しそうな姿や声の調子を見せてしまう。

それが余計に、親を不安にさせるのだ。

だからこそ、一切自分が苦しむ姿を見せずに、成功した最高の形で会いにいったのが、今の僕にできる最高の親孝行だと思ったのである。

わざわざ、両親の話を交えているのは、多くの20代が自立できておらず、すぐに親を頼ろうとするからだ。

もし、20代半ばを超えても、親の意見を交えながら、今後の将来を決めている人は、すぐにでも辞めたほうがいい！

いつまで経っても、自分で将来を決めていけないし、すぐに誰かに頼ろうとするからだ。

本当の意味で、自立したいのなら、自分の力だけで物事を判断し、結果を残せる実力を身につけよう。

それが終わった後で、ゆっくりと世話になった人たちに恩を返していけばいいのではないだろうか？

相手を配慮しているつもりが、自分が嫌われたり、傷つくのが怖いだけの可能性は大いにあるのだから。

さて、話を戻し、早速アフィリエイトの結果が出だした僕だったが、その後も順調だった。

作ったうちのサイトのいくつかが、急にいくつかのキーワードで上位の順位を占めだし、実際に商品が売れ出したのだ。

四ヶ月目に、数個の商品が売れて、報酬が一万円になると、五ヶ月目には一気に五万円ほどの報酬に膨れ上がった。

アルバイトもその頃には新しく決まっていたから、毎月10万円くらいのお金になり始め、微かな

がらも、アフィリエイトに対して期待が膨らんでいく時期だった。

そして、半年がたった頃には、10万円くらいの報酬が自分のサイトから勝手に発生するようになり出したのだ。

ここまで来て、ようやく「ふー」と胸を撫で下ろすようになってきた。

バイトと合わせて、15万円近く。(※結局、バイトはシフトの関係で中々入れず、月に5万円くらいしか稼げなかった。)

会社員の頃には及ばなかったが、生活する分には困らなくなっていた。

「よし！このまま月収100万円だ！」

が、しかし、ここからが大変だった。

全然報酬が大きく上がらない。

色々手を変え、品を変え、サイトを修正するのだが、上手く行かなかった。

元々サイトの構成があまり良いものではなかったもので、新しくサイトをいくつも立ち上げ、

「よし！このサイトなら！」

というものを生み出してはいた！

でも、軒並み失敗に終わり、結果に結びつかなかった。

「う～ん？何でだろう？」

原因は良く分からなかった。

でも、その間に勉強はしまくった。

いろんなサイトを見て回ったし、セミナーや懇親会などに参加して、情報を集めまくった。

この時が一番苦しかった。

やることはやっているつもりなのに、結果に中々結びついてくれない。

あなたも、こういう苦しい時期を経験したことがあるのではないだろうか？

頑張っているけど結果が出ない時が一番苦しいのだ。

とりあえず、サイトを作り続ける日々は一年半近く続いた。

でも、報酬は一向に伸びずに、海外に冒険しに行くことはずっと叶わなかった。

とてももどかしい日々が続き、「やっぱり自分なんかじゃ・・・」と、アフィリエイトを投げ出したくなる時期も沢山あった。

しかし、もう自分にはこの道しか残ってはいなかった。

年齢も20代後半を迎え、会社を解雇された後、いくら自分でやっているとはいえ、世間的に見れば無職のような男だ。

今更社会に戻れるワケがない！

明かりの見えない、暗闇をさまようかのような暮らし・・・

酷く自分の能力の低さがうらめしくもなった。

そんな時、居候させ続けてくれた友人の元に、一通の手紙が来た。

「このアパートと一緒に住んでいる人間がいる場合は報告せよ！」

友人が借りているアパートの管理人からだった。

実は、そのアパートは一緒に暮らしている人がいる場合、配偶者でないのなら契約違反となるので、即退出させる決まりだったのだ。

「まあ、大丈夫っしょ！気にしなくていいんじゃない？」

僕は契約違反で罰金がとられるんじゃないかと思って、かなり不安になっていたが、楽天家の友人はあっけらかんとそう言い放った。

「いや、でも、マジで契約違反で罰金払わされたり、お前まで追い出されたらヤバクね？」

ただでさえ、居候させてくれている友人にこれ以上迷惑をかけることなんて出来ない！

僕は、一年半お世話になった友人宅を離れる決心をした。

まあ、正直な話、友達がいることで、作業に集中できないこともあったし、一応生活できるだけの稼ぎは得られるようになっていたので、近い内に家を出ようとは思っていた。

今回の件は、タイミングもいいし、これからは一人で頑張っていこう！と思ったのだ。

東京は家賃が高かったなので、茨城県の激安アパートを見つけ、そこに住むことに決めた。

なんと、一ヶ月の家賃が25,000円である。

これなら、ほとんど月収がない僕でも、負担をかけずに暮らしていける。

しかも、霞ヶ浦が徒歩五分で向かえるから、いつでも釣りができるというのが、ありがたかった。

僕は目標をアマゾンでピラルクを釣り上げる！という設定にするくらい釣り好きだったから、釣りをしてはサイトを作って、サイトを作っては釣りをする！というライフワークバランスを目論んでいた。

「霞ヶ浦かぁ・・・」

パソコンの手は休めず、タイピングし続けながら、一人ニヤニヤしながら、行った事もない霞ヶ浦での釣りを想像していた。

これで、まず一歩！

ほんのちょっとだけど、ホームレス時代よりは前へ進んだ！

一年半かかっていたの一人暮らしへの自立である。

でも、本当に友人には色々助けてもらった。

やっぱり会社を解雇されたショックというものはとても大きかったし、彼がいたからこそ僕はアフィリエイトの孤独な作業に耐えられた。

一人だったらアフィリエイトで叶える夢を自信をもって進めなかったように思う。

感謝の気持ちがいっぱいで、涙腺は緩みそうだった！

少ない荷物を、まとめ、霞ヶ浦に向かう前、男の友達同士で恥ずかしい気持ちは感じていたが、最後は握手で「本当に今までありがとう！」とあって、彼の家を後にした。

新世界に向けて、歩き出す！

さて、新しい家に引っ越してからは、家電製品などが大変だった。

何しろ僕は、ほとんど一文無しだ！

いくらアフィリエイトで生活費をそこそこ稼げるようになったからと言って、冷蔵庫も、洗濯機も、ガスコンロも買えなかったのだ。

だから最初は、電子レンジだけを超格安で見つけてきて、レンジだけに頼った食事生活を余儀なくされた。

100均なんかいけば、電子レンジで作れる米炊き容器やラーメンを作る容器なんかが手に入る！

簡素に出来る、電子レンジ専用の料理器具を見つけてきては、それだけで、料理を作って食費の出費を限りなく抑えようとした。

勿論、洗濯なんかは手洗いである。

お湯も沸かせないから、電子レンジでお湯を沸かしていたし、冷蔵庫がないから食料が腐ったりもした。

お風呂もお湯が勿体無いからと、なるべく水シャワーで済ますようにし、冷房もほとんど使わなかった。

ほぼほぼ、ホームレス時代の生活と変わらなかったのではないだろうか？笑

しかし、新しい家に引っ越してから心は最高だった。

遊びと仕事が一心同体になったからだ！

会社員の時、生活は出来ていたけど、僕の心はいつも塞ぎこんでいた。

クリエイティブさの欠片もないどこか同じような仕事、息抜く暇のない緊張感、仕事が出来ないものを除け者にする重苦しい雰囲気・・・

こういった事を職場内で感じるだけで、仕事のやる気は下げられた！

だから、心から楽しめる遊びをやりながら、好きな時に自由な時間で仕事が出来るというのは、生活の苦しさ以上に僕を救ってくれていたのだ！

僕は、会社員の時代、いつもこんなことを考えていた。

「なぜ、毎日同じような時間に同じようにいつも頑張らないといけないのだろうか？人それぞれ、体調やその日の気分があるのだから、もっと自由な風土にした方が生産力は上がるのに・・・」

まさに、それが証明されたかのように、僕のアフィリエイトに対するやる気は鬼のように増していった。

朝は3時に起き、まずは一記事書き上げた後、そのまま釣りに行く・・・

釣りを三時間ほど楽しんだ後は、また家に帰ってきて、簡単な食事を食べ、またアフィリエイトに没頭する・・・

昼間になると、眠くなってくるので、ちょっと寝た後、また夕方は魚が釣れやすくなるので、釣りに行き、帰ってきてから、またアフィリエイト・・・

アフィリエイト⇒釣り⇒アフィリエイト⇒釣り⇒アフィリエイト

と、まさに釣りとアフィリエイトが一体となったような生活だった。

でも、仕事の中に遊びを取り入れたりしているから、気分がリフレッシュされて、仕事の集中力が高まるのだ！

今でこそ、ほとんど仕事をしなくても勝手にお金が入ってくるようになった僕だが、それでも仕

事をする時は、合間に釣りを入れるようにしている！

仕事のアイデアが、遊びの合間に生まれるのである！

実は、茨城に引っ越した瞬間、今まで10万円近く発生していた報酬が一気に4万円にまで下り、めちゃくちゃ焦らされた。

ただでさえ、引っ越してきたばかりなのに、一回家賃を支払ったら、また一文無しだ。

だからこそ、自分に後が無いことを常に言い聞かせ、これまでのサイトの反省点を踏まえながら、必死にサイトを作った！

まず手始めに、自分がアフィリエイトしようと思うジャンルの本を10冊ほど買い込み、自分でも商品のサンプルを試したり、実践しながら実体験談による成功事例を元にしたアフィリエイトサイトを作ることにした。

とにかく、現在はアフィリエイトで生活する人も増えてきていたので、生半可なレベルのサイトを作っても意味がない！と思ったのだ。

記事も一日で5,000文字近くビッシリ書き込んだ物を3,4記事とか書くことにした。

400文字の原稿に表すと、40枚ほどの量である。

無論、ここまで書くには既に自分が本を一冊書けるくらいのレベルになる必要がある。

だからこそ、専門誌を10冊読んだり、自分で実際に経験も積んだりしたのだった！

「このサイトは絶対に爆発するはず！」

一年半ほどの勉強の全てをつぎ込むつもりで、めちゃくちゃ色々なサイトを勉強して、記事の内容に厚みを持たせまくったから自信はあった。

これがダメだったらもう無理だ・・・

そう自分で思うくらいの熱意をつぎ込んだ！

すると、サイトを開設して2ヶ月ほどしてからだっただろうか？

いきなりサイトが、狙っていたキーワードで一番目に来た！

そして、爆発的に報酬が伸び出したのだ！

「えっ・・・？今日のアフィリエイト報酬3万円・・・？」

サイトの売り上げ画面を開くたびに、1～3万円の報酬が発生していた。

そして、多い日には何とたった一日で5万円とか、6万円とか稼いだ・・・

これはヤバイ・・・

今までの停滞が嘘のように、他のサイトも売り上げを上げだし、加速的にアフィリエイトの売り上げが上昇していった。

最終的にその月の売り上げは、30万円。

会社員時代の残業を含めた最高給料額と同じ金額だった。

そして、その後も安定して、サイトが稼ぎ続けてくれて、大体40万円～50万円がコンスタントに自分の懐に入り込むようになったのだ。

「よしっ！ついに俺はやったぞっ!!!!これで、本当の意味で自由だ！」

建設業、経営コンサルタント、ホームレス、独立・・・

社会に出てから7年！

僕は、やっと心身共に自分に見合った生き方というものにたどり着いたのだった。

普通の人から見たら大した金額ではないかもしれない！

でも、僕にとっては、本当に満足できる金額で、そこに到達出来たのが、心の底から嬉しかった。

2016年、4月1日！

僕は満面の笑みを携え、タイのバンコクに降り立っていた。

念願だった、世界最大の淡水魚、ピラルクを釣りにやってきたのだ。

アマゾンでのピラルク釣りは残念ながら、今の僕の経済力じゃあ達成できなかったが、タイでも安くでピラルクが釣れる！ということで、社会人初の海外旅行に飛び出したのだ。

ホームレスになってからまる二年である！

タイという国は、真夏のように暑い国だったが、時折吹く風がまるで僕を祝福してくれるように

気持ちよかった。

タイの地に降り立った時、憧れていたような生活が現実のものとして実現できたのだと強く実感された！

「うわぁ！これはヤバすぎる～！」

僕が行ったのは、タイのアマゾンBKKという野池だ。

そこでは、ピラルクを大量養殖しており、僕のようなピラルクが釣りたくてたまらないアングラ一達が世界中から集まってくる聖地のような場所になっていた。

近年では、中々ピラルクも釣れないことが多くなってきたそうだが、その日はガイドの人も驚くほど、ピラルクの食いつきが強くなっていた。

そして、二年前からピラルクを釣ることを夢見ていた僕の竿に、ついにピラルクが掛かったのだ！

「グイグイ！ズギャーツツツ！」

鬼のように竿をグイグイ引っ張り、ラインが引き出された！

僕も、竿を持っていかれないようにと、右、左へと巧みにロッドを操る！

これまでに幾多の魚を釣ってきた僕が、味わったことのない、超強烈な引きだった。

とてつもない、巨大魚の引きを楽しみながら、心の中で

「神様ありがとう！人生って最高だ！」

とつぶやいた。

当然である！

二年間もこの瞬間を待っていたのだ。

神様に感謝を言いたくなるほどの喜びを感じながら、最高のひと時を味わった。

その釣り場には4人の釣り人がいたのだが、結局その日、ピラルクを釣ったのは僕一人！

これまでの苦労が全て幸福となって返ってきた。

それからの僕というものは、とても幸せだった！

本当に好きな時に起きて仕事をし、時間、場所を問わず、遊びに出かける毎日となった。

いくら遊ぶといっても、金持ちのアホみたいな感じで散財するワケではない。

色々有名な観光スポットを回ったり、ボクシングなどを始めて、体を鍛えたり、大好きな本をオシャレな喫茶店でゆったり読んだりする毎日だ。

ちょっとでも、仕事のマンネリ化をなくし、自分に刺激を与え、そうしながら仕事のアイデアを沸かせて、それを元にして、面白いアイデアを考え、仕事に生かす！

まさに、遊びと仕事が一体となったような生活を遅れるようになったのだ。

他の人は、こういう生き方を一時的なもの、将来を考えない生き方！というかもしれない。

でも、僕にとってはまぎれもなく、自分自身にあった生き方だし、これ以外の生き方はできなかった。

また、稼げなくなったら死ぬ気で仕事すれば良いし、自分自身でお金を生み出せないようだったら、会社員だろうが、何であろうがどこにいてもダメな人間になると思っているからである。

そして、わざわざこんな恥ずかしい人生を赤裸々に書いたのも、会社で生きられない、あるいは今の、今までの人生に不満がある人に一種の希望を持たせたいと思ったからだ。

確かに、サラリーマンで生きていけば安定している人を見かけるかもしれないし、周りが幸せそうに見えると、その生き方が絶対的に正しいと思えてくると思う！

でも、別に会社じゃなくても生きていけるし、人間関係が得意な人じゃなくても生きていける！

なぜなら、ホームレスにまで落ちてしまった僕ですら、今はこんな感じで、サラリーマンよりも多い月収を得ながら自由に生活しているのだから！

もし、あなたが今、人生に絶望していて、未来に何も希望を持ってないというのなら安心して欲しい！

道はいくらでもあるからだ。

そして、いつになっても挽回は可能なのだ！

しがみついても会社に雇われて生きていくほうが確かに毎日の生活費に関しては不安は減るだろう。

でも、それよりも、自分の人生に失望して、何のやる気も出せなくなる方がよっぽど怖くはないだろうか？

多くの人が勘違いしている事が一つだけある・・・

『自分には出来ない！』

と思った瞬間が負けなのだ。

自分ならやれる、どんな状況になっても、しっかりと学んで、努力し続ければ、必ず手に入れたものは手に入る！と信じてさえいれば、100%その想いは叶えられるのだから、『出来ない理由を探す』事だけは辞めて欲しい。

僕は、数多くの失敗をしてきてしまったが、結局最終的には、高い給料、やりたい仕事、自由なプライベート、全てを手に入れた。

それは、建設業時代に、本気で強く望んでいたことは手に入る！と理解していたからだ。

人生一回きり！

最後に成功すれば、過去の出来事も全て感謝に変わるし、今までの嫌な出来事は全てプラスとなって返ってくる。

今、既に自分の生活に満足していない人は、自分の望む、最高の人生をもう一度見つめなおし、そのためには何が必要なのか？何をやらないといけないのか？をよく考え、それを本気で得ようとして欲しい。

妥協した上で手に入る不満な人生なんて、死んでいるのと何ら変わらないのだから。